「二三五番。」
「國籍は？」
「英國。」
「よろしい……さあどうぞ！」
サミュエルは大佐に促す。
大佐は、紗の布をとほしてぢつと、その男の風體を觀察する。年は卅二三位。灰色の髪毛、凹んだ目。その底に光る眼球、しやくつた顎。すべてが凄く陰氣に出來てゐる。
あまりに格構が出來すぎてゐる——と大佐は考へる。しかし、問を發した。
「君の經歷は？」
「前科三犯……しかしすべて、スリです。出獄後、サミュエル氏の門をくぐり某國の間諜としてトルコに出張、某大官から、某書類をすりとつて、殊勳を立てましたが、後にトルコ官憲から捕縛され投獄。やうやく破獄して歸英。」
「間諜としての得意の技術は？」

「スリ。」
凄い奴だとさすがに大佐は舌を卷いた。顏はいんきだが、應答が、はつきりしてゐるのが氣に入つた。かういふ男こそ、職業的間諜以外には求められない。
「よろしい、後刻採否を通知する。」
退場。
「いかゞでした。」
——サミュエル。
「氣に入りました。」
——大佐。
サミュエルは、ニヤリとして次ぎの呼び鈴を押す。今度は、四十位の赤毛赤鬚の男、脊は餘り高くないが、小ぶとりで血色がいゝ、目は所謂ドングリ目で、こんな男は概して勇敢でも聰明でもない。しかし、いかにも實直らしい感じを與ふる。
彼は、國際的間諜として働くこと廿年、サミュエル氏の門下中の最古參で、あらゆる困難と

戰つて來たその經驗が自慢だ。彼は言ふ。——

「私は、警察界に身を投ずるつもりでしたが、會にく、試驗に落第したのです。そこをサミュエル氏にたすけられ、それ以來、忠實に各國政府の役目をつとめて來たものです。私は常に精一ぱいの力を、仕事にうちこみます。しかも、用意はつねに周到です。御覽下さい。」

彼はかう言つたかと思ふと、右手をあげて顏を撫でた。すると顏の下半部を覆ふてゐた赤髭がぱさりと、彼の左手に落ちた。

「こんなものです。」

大佐は、彼の稚氣と臆病らしさが氣に入つた。かうした臆病な者には存外失敗がないのだ。

彼が猶、喋りつゞけようとするのを大佐は制した。退場、つゞいて、よび鈴。以下略……。

大佐は滿足した。色とり〴〵の六人の間諜をえらび出すことが出來たのだ。大佐はサミュエル氏に手數料をはらつて、この奇怪な、複雜な外交關係からしか生れ得ない、間諜供給所を辭した。夜になれば、この六人が大佐のかくれ家を訪ねてくる筈である。

六、ロンドン

1

新綠に燃ゆるロンドンの郊外へと大佐の汽車は走る。一時間餘にして△△△△△に下車。そこは美くしい靜かな住宅地だ。生けがきにも花が薫つてゐる。庭にも花が咲き亂れてゐる。その間に温室の光る屋根が見える。——全體が花園だ。花園の中にある瀟洒な家々。

その家の一つに大佐は姿を消した。一番の奥の一室。大きな頑丈なテーブルの上には化學用品。ある特殊な臭ひ。大佐は、一人の日本紳士と相對してゐる。中には、一箇の黑い箱が無氣味に置いてある。

「これか。」

大佐は、箱に目を落す。

「これです。」

相手が靜かに答へて大佐を見る。年は大佐より四つ五つ下か。無性髯がザラ〳〵にのびてゐるところを見れば、もう暫らくこの家にとぢこもつてゐるらしい。目には學者らしい靜かさがたゝえてゐるが、チラと見上げたところは、なか〳〵鋭い。その筈だ。彼はコロンビヤ會社の一社員としてしか知られてゐないが、實は田中廣太郎中佐の假の姿である。

彼はつゞける——

「萬全を期して製造はしましたが、實行する前に、是非一度試驗をして見たいので、お立ち合ひをお願ひしたのです。」

大佐はうなづく。

この時一人の若い白人がノックしては入つて來た。

「技師のワトソン君です。」

田中中佐は大佐に紹介した。つゞいて又一人、英國參謀本部の大尉エドワードであつた。彼はこの仕事を陰に陽に援助し、英政府との了解役をつとめてゐる。

やがて、上野の他三人の日本青年、四人の白人壯漢がやつて來る。

「あやしい奴が、門のあたりをうろ〳〵してゐます。」

と上野が報告。みんなの顏が緊張する。

「なに、大丈夫です。隣家はワトソン君に棲んで貰つてゐます。この家と通路がつくつてありますから、隣家の裏口から出發しませう。實はそのつもりで、馬車を廻しておきました。」

田中中佐が制して、上野に目くばせする。上野は、卓上の箱を、カバンにおさめて持つ。總勢十一人、足音を忍んで庭に出る。庭にはバラの香が滿ちてゐる。その間を行くと隣家との石垣、田中中佐が、ある一點をおすと、そこに人が通れる位の穴があく、隣の庭、ついで裏口、二臺の馬車が待つてゐる。二組に別れて乘車。

先頭の馬車には、エドワードが乘る。彼は案内役だ。その横に大佐も同乘。走り出す。初めは坦々たる道を二時間、その道からそれてから、次第に、せまくなる。

エドワード大尉は、大佐に言ふ。

「もちろん、陸軍の附屬地ですが、特に秘密を要する試驗のほか使用しないのです。」

「感謝します。エドワード君。あなたの御骨折りについては、既に本國に通知しておきました。」

「そんなこと大佐殿……同盟國の一員としての義務です。いや、實は、わが英國も敢然立つて露西亞に宣戰するところです。我等少壯武官はこれを主張したのですが、何しろ、ヨーロッパの外交關係は、非常に複雜且デリケートでして、英露の衝突は、遂に全歐洲の動亂になるおそれがありますので……」

「たしかにさうです。私もさう信じます。露西亞が日本を見くびつたのも、貴國が宣戰出來ぬ情勢の中にあるのを見きはめたからでせう。」

「しかし、英國にして恐ろしいのはドイツです。」

「なるほど、さうでもありますね。」

馬車は、次第に人里をはなれて一つの森の前まで來て止る。一行は馬車をその森の中にかくし、細道をつたつて、徒歩で奥に進む。三十分程の道のり、一つの斷崖をおりると、可成りの廣さを持つ、石ころの凹地がある。周圍は斷崖と森にかこまれてゐる。

「實に妙な所ですな。」

大佐がエドワードに話しかける。

「さうです。なんでも昔は一寸した湖だつたらしいのです。それが、いつからとなく水がなくなつて、御覽の通りな無氣味な場所になつたのです。中世紀には、こゝが盜賊の棲家になつたこともあるし、又、逆徒の集會所になつたこともあるのです。」

一方、田中中佐、ワトソン技師に率ゐられた一行は、黑い影のやうに、石ころの間を歩きまはり、默々として準備にかゝつてゐる。

中央に巨大な岩石が蟠居してゐる。一行は、その周圍に集る。少しはなれて大佐とエドワード大尉が立つてゐる。

田中中佐は手を下げて一行を見まはして口を開く。緊張する。

「諸君、本日は、これから××の性能試驗と併せて、實地訓練を行ふ。諸君は、既に××の使

用に就いて充分な知識を得ておられることゝ信ずる。又役割も承知しておられることゝ思う。こゝにある巨岩――勿論、實際は鐵橋だが、その裝塡はほゞ變らず、これを目的物と假定する。指揮官は、上野君の筈。初め！」

中佐の凛然たる號令と共に、一行は、一旦この巨岩をはなれて、一偶に集合。明石大佐、田中中佐、エドワード大尉、ワトソン技師の四人は別にかたまつて、彼等の行動を注視してゐる。

上野が手をあげて何かの合圖をする。七人は、ぱツと散開する。それ〴〵手に持つてゐるーハンマ、ノミ、シャーベル、テコ、黑い箱、黑い袋……。

彼等は、散開したまゝ石ころに身をかくし這ふやうに、目標の巨岩に近づいて行く。先頭に行くは上野、彼は先づ標的に達し、身をくゞめたまゝ、手をあげる。全員が、サツと巨岩にとびついたかと思うと、忽ち、土をかく者、穴をほるもの、テコをつき入れるもの――默々と、しかし迅速に各自の作業を進めて行く……。作業終り。

一點にうづくまる上野、手をあぐる。作業隊は、後に。上野は靜かに巨岩をはなれる。廿メ

ートル、そこが導火線のはし、點火！　巨岩に走る火、後に斷ける上野。破るゝ火、轟然たる音響、黑煙、降る石片……。

一行は馬車に乘つて歸る。顏は成功に光つてゐる。

2

日露の勝敗に關して、露國の軍隊輸送力が重大な關係を持つてゐることは、誰しも着目するところで、單なる用兵の上から見れば、この輸送力如何によつて、日露の勝敗は決定すると言ふも過言ではなかつた。

勿論、軍部に於いては、この點について、充分な調査の上、自信をもつて戰端を開いたのであつたが、歐洲における一切の謀略を雙肩になつた、明石大佐として、歐露の鐵道を破壞して輸送力の減退を計ることの計畫は、むしろ當然のことだつたのである。

大佐は、開戰前、既に、ロンドンのコロンビヤ會社の一社員として諜報勤務に從事してゐる田中廣太郎中佐に內命を發し、開戰と同時に、上野仙之助を、中佐の許に走せ參ぜしめ、××

の製造に從事せしめると共に、一方壯丁を募集して、鐵道爆破の作業を敎授せしめたのであつた。

陸軍附屬地における試驗は成功した。上野を主斑にした日本人三名、英人一名、露人一名、ルーマニヤ人二名より成る特別斑は、一行のルーマニヤ人の發意により、ルーマニヤと露西亞國境の間道より、入露を企てることになつた。日本人三名は、日本人に酷似してゐるコーカサスのカルミユク人に扮裝することにした。日本人三名は、もとより、國を思う情熱に燃え、一死報告の覺悟を定めてゐたが、四名の外人は、必ずしも義俠からばかりでなく、痛快な冒險心が、彼等をかつて、この行に加はらしめたのだつた。彼等の前身は、アフリカの探險家であり、南米獨立運動の壯士であつた。

出發の準備はなつた。五月下旬の或日のことだつた。大佐は、リパーブルの棧橋に立つてゐた。横には、宇都宮大佐、田中中佐もゐる。今や、出帆せんとしてゐる汽船の甲板には、七人の志士が立つて、こちらを見てゐる。しかし、船にゐるもの、棧橋に立つもの、目くばせ一つしない。どこに、どうして間諜が潜んでゐるかも知れぬ。七人は只漫然と棧橋に目をなげてゐ

るだけ、見送る三人も亦同じ。

ドラの響、やがて汽笛、船は靜かに棧橋をはなれる。雙方、ハンカチも振らず、手もあげず……しかし、いつまでも立ちつくしてゐる。

「先生。」

誰だか近寄つて、そつと明石大佐の耳近くさゝやいた。大佐は、ハツとしたが、靜かに振り向いた。

「おう、ヨーハン！」

「しつ！　先生、マノニロフがゐます。」

大佐は、うなづいて、素知らぬ風で、驚いてゐる宇都宮、田中に話しかけた。

「兩君、こゝでお別れしよう。しかし露の探偵につけられてゐる。二人共、別々に、なるだけ道を變へ、あやしい奴がつけてゐたら、まいて歸つてくれ給へ。」

二人は、緊張する。宇都宮大佐は言ふ。

「明石君、實に……どうも君といふ人物は……」

後は言はず、ニヤリと笑つて歩き出す。田中中佐は、そつと耳うちする。

「船内の連中には……」

「とに角、上陸地へ電報を……」

「はつ……」

中佐去る。

「どこにゐる？」

「今、電話をかけに、レストランには入つてゐます。もうすぐ出てくるでせう。」

「そして君は？」

「まだ曝露しません、彼の手先きです。」

「よし、行かう……」

「どこに……」

「マノニロフと會はう」

ヨーハンは一寸あきれた顔。

「どのレストランだ。」

「ホラ、あのホテルの隣」

「よし、お前は尾行の形をとれ！　待て！　僕達が何しに、こゝに來てゐるか知つてゐるか？」

「いゝえ今の先、船で着いたばかりです。偶然あなたがマノニロフの目についたのです」

ホツとした大佐は、すた〳〵と歩き出す。ヨーハンは不安氣に、大佐と一寸はなれて尾行するやうな風でついて行く。

ぱたり！　レストランの入口で、大佐とマノニロフは顔を合せた。

「おゝ、ルベエ教授！」

大佐は、いきなり、マノニロフの手を握つた。彼は不意をうたれた形だ。

「や、やや、これは大佐殿……」

「久し振りだつたなあ……一ぱいやらう。」

大佐は、否應なく、マノニロフを、レストランに連れもどした。駄々つぴろい港のレストラ

ン。海員や、旅行者が、まばらにテーブルを占めてゐる。

「マノニロフ君！」

大佐はズバリと言つた。

しかし、マノニロフは驚かず、切り返す。

「淺野さん！」

大佐の假名だ。大佐は一寸驚いたが、すぐ平靜。

「淺野、ナルほど、人間は色々の符合を持つてゐる。別に不思議はない。君だつて、僕だつて、一寸立て役者だからなあ、マノニロフ君。」

「どうも、話がむき出しですね。」

「しかし、マノニロフ君、僕が、ウマク代玉をつかつて、ストツクホルムをぬけ出した手法は、どうだね。いかに探偵長のマノニロフも盲同樣だつたね。どうも僕の方が役者が上らしいぞ。」

「ふん、ありや、手下にヘマな奴がゐたからですよ。その證據に、すぐ、あなたのかくれ家を

探し出しましたからね。」

「感心々々、君は、早速、忍びこんで僕の書齋を調べて見たゞらう。ところで、僕は書齋に、非常な重要な書類を置き忘れて來たんだ。しかも、その書類は、特に君の名譽に關するものだつたが、君は發見したゞらうねえ。」

マノニロフの顏は、見る〳〵赤くなつた。押へ〳〵てゐた怒りと恥が、彼の心をかきみだしたのだ、彼は、ワナ〳〵とふるえた。口を利くことも出來ない樣子だ。

「う……う……さてはわざ〳〵……僕を」

大佐は嘲笑した。しかし眞面目に、

「はツはツはツマノニロフ君、僕は、君の奥さんが僕にくれた手紙を君に進呈して、君の反省を促したゞけだ。君の妻君は實に怪しからん女だ。君の秘密まで敵手の僕に話さうとするほど不貞な妻だ。わが日本だつたら一刀兩斷の許に切り棄つべき者だ。マノニロフ君僕は斷言する——僕はいかに必要があればとて斷じて、かくのごとき不貞な女から秘密を握らうとは考へてゐない。僕は避け難いものとして戰爭は是認するが、それによつて世界人心の道德心まで、こ

ぼつことは好まない。君臣の大義、父子の情義。夫婦の貞操――さうしたものを破壞したくないのだ。」

大佐の言葉は、半ば眞實であり半ば皮肉であつた。

マノニロフは、壓服されたやうに、大佐を仰ぎ見た。大佐は嚴然と、マノニロフを見下してゐる。敎父のやうなおごそかな顏で。

「君に會つたのを幸に、これだけ言つておく、さようなら。」

大佐は、立ち上つた。そして、何事もなく悠々とレストランを出て行く。

マノニロフは、明らかに敗北を感じた。

「偉い奴だ！　偉い奴だ！」

彼は、かうつぶやきながら、大佐の出て行く後姿を見おくつた。ヨーハンが近づいて彼の肩をたゝいた。

「旦那、行つちまいますよ。尾行しませうか。」

マノニロフは、愕然と自分にかへつた。が自分では動かうとしなかつた。

「うむ、お前尾行しろ。しかし、大方駄目だらう。あの男は惡魔か、でなけりや神だ。きつと途中でまかれつちまふよ。」

ヨーハンは出て行く。

マノニロフはいつまでも動かうともしない。

大佐はヨーハンをウエストハムのかくれ家にともなつた。ヨーハンは語る――手筈通り、大佐の身代りになつたビヨルンソン某家の二階を借りてゐたヨーハンの仲間の一人が、カツラをぬいで、姿を消して終う。リエスが、もう空巢になつた大佐のかくれ家をマノニロフに知らせる。マノニロフが忍びこむ、その後で、夫婦喧嘩。マノニロフは大佐の行衞を英國とにらんで旅行に出る。ヨーハンが彼の手先になつて同伴する。そして今日までの經過を。

大佐は、ヨーハンに今後の意をふくめて、卽日、チャーリンクロスの裏通りにあるホテルに引越した。そこは、かねて、シリヤクスと會合するため定めておいたかくれ家だつた。ヨーハンが、マノニロフをつれて、ウエストハムの大佐のかくれ家にふみこんだ時は、勿論大佐の姿はなかつた。

3

シリヤクスは東奔西走をつゞけた。そして彼が大佐を訪れたのは六月の初旬の頃だつた。二人は、ホテルの大佐の居間に相對した。シリヤクスは、その後の運動の經過を述べ、さて膝を進めて言つた。

「明石さん、私としてなすべきことは先づ、これで一通り濟んだと思う。愈々、あなたが出るべき時機が來ましたよ。」

大佐は、手を振つた。

「シリヤクスさん、私が表面顔を出すのはいけないと思う。あくまで、あなたが名實共に中心となり、この大事業を遂行して貰ひたい。私は只、裏面の人として、只資金を調達するといふことにして戴きたい。それは決して、私自身の都合からのみではありません。不平黨の有志諸君にしても一日本人——しかも一大佐によつて、これが主催されることは、體面上好感を持たぬと考へるのです。」

「いや、斷じてさうではないのです。」

シリヤクスは、さへぎつた。

「もちろん、かゝる大事業に對して、あなたが徒らな謙遜から、さう言はれるとは思ひませんが、この事業は、名目はいづれとも宜い。實際の中心人物として、あなたに顔を出して貰はねば、到底成立は覺束ないと思ふのです。」

「さうでせうか。」

大佐は解せない顔。シリヤクスは熱心につゞける。

「大佐、あなたが日本人であることが、彼等の體面上、少くとも辯解しなければならない程度の障碍があるのは事實です。しかし猶、あなたに出て貰はねばならぬ點は、あなたの人物です……大佐、私は決して、あなたに誤らうのではないのですぞ。露國内の不平黨が共同戰線を張るといふことは、必ずしも、今私達のみが考へたことではないのです。前にも、又現在でも、誰しも一應は考へて見たことなのです。しかし、同じ目的を抱いてゐるやうで、實は、それ〴〵にちがつた主義綱領を持つてゐる各黨のことですから、連合の實行は、到底不可能のことゝし

て、誰もこれに手を出すものがなかつたのです。しかし形勢は一轉したのです。その一つは、日露戰爭そのものです。戰爭の虛を衝く——これは、眞近かなところに一致點を見出す手づるとなつたのです。二は大佐、あなたの出現です。」

「いや、シリヤクスさん、それは私でなくて金でせう。資金でせう。」

大佐の言葉は鋭かつた。シリヤクスは半うなづいた。

「勿論、それもあります。しかし、それは私が述べようとする第三の條件です。事實、私が今日までの運動は、先づ資金提供を條件として話を進めてゐます。資金缺乏に惱んでゐる各黨は、これによつてある點までは導かれて來ました。だがこれ以上實際化するには、人物が必要です。大佐、實に、あなたの人格思想は、不思議な存在です。あなたは決して、僕等と同じ思想を持つてゐる人ではない。あなたは一つの軍國主義者にしかすぎない。だのに無類の信頼を感ぜしめるのだ。私は、この點が、こん度の連合の中心に立つ人物として、最大な條件だと考ふるのです。」

大佐は答へた。

「よくは解りません。しかし、私は、あなたの言葉を信じます。あなたの御指圖に從つてどこにでも出かけませう。そして誰とでも會つて連合の話を進めませう。」

シリヤクスの顏には、眞によろこばしいほゝ笑みが浮んだ。

「有難う、明石さん、きつと今度の計畫は成功するでせう。」

電話のリンがなる。

宇都宮大佐からだ。

二人の電話での會話。

先づ宇都宮大佐から日本語で——

「參謀次長からの返電だ。」

「ウム、何と來た。」

「今讀む——キカノモウシデヲシヨウニンスカネハシヨウキンギンコウニオクツタナカオカ（暗號平文に譯す）わかつたか。」

「わかつたありがたい！」

「よかつたなあ……」
「ウム……」
「他に用はないか。」
「あ、ある。」
「うむ」
「君に會つて貰ひたい人がある。よかつたら今直ぐ來てほしい。」
「……よし、行く。」
「待つてゐる。」
電話をきつた大佐は、直ぐシリヤクスの方へ向かず、起立して東方に頭を下げた。大佐は一大決心をもつて、參謀本部の回答を待つてはゐた。むろん、相當の金額は、大佐の活動費として提供されてあつたが、不平黨操縦費として、大佐が最後に、要求した金額は豫想外に巨大なものであつたのである。果してこれを參謀本部が承認するか、大佐以外の關係者はむしろ、これを不可能と信じてゐるものが多かつた。事實、參謀本部では、異論を唱へるものが多く、一

時は全く絶望にひんしたこともあつたのである。大佐は、外面悠々として、シリヤスク等と策動しつゝあつたのであるが、内心は、若しこれが容れられぬ時は、歸朝したいとまで、參謀本部に申しおくつたのである。これに對して參謀本部からは、補充隊長で滿足するならば心當りもあるといふ、極く冷たんな返事だつた。しかし、大佐の赤心は次第に要路の大官を動かし始めた。
「まさか、明石が誇大妄想狂にかゝつたわけでもあるまい。彼がこれほどまで自信と決意を持つてゐる以上、とに角要求の金額を與へよう」
といふことになり、留守參謀次長の中岡將軍からの飛電が到着したのである。
頭を垂れた大佐の目には、さすがに涙がにじんで來た。考ふれば、よくも、一大佐たる自分に、この大事業と大資金を托されたものだ。大佐は感激せざるを得なかつた。
シリヤスクは、日本語を知らない。何故に大佐が、感激してゐるかわからない。しかし只、なんとなく、しんみりしてゐる。大佐はやおらに、顔を向けた。力にみなぎつた明るい顔だ。
「シリヤクスさん、本國政府も、あなたに滿腔の信頼をさゝげるさうです。」

大佐は、これだけ言つて、シリヤクスの手を握つた。嘘でない嘘だ。やがて宇都宮大佐來る。これは略す。翌日、大佐は、檄文費として三千圓をシリヤクスに渡した。

4

マノニロフは、ウエストハムのかくれ家に、大佐の姿を見失つた時、むしろ當然のことに思はれた。そして、半放棄するやうな氣持ちで、早々パリーに引きあげた。彼は、接すれば接するほど大佐の正體がわからなくなつた。見たところ、大佐は嚴格で、單純で奇策を胸にいだいてゐる人物には見えなかつた。しかも、非常な力でせまつてくるものがある。かくしてゐなければならぬことでも、ずばり〳〵と言つてのける。まるで無茶だ。その癖、その言葉は、一〳〵、肺腑をつく。

マノニロフは支部近くの酒場の片隅にチビリ〳〵と酒をなめながら、つぶやくのだ。

「一體、彼奴ア、しつぽがないのか……うむない。この俺がつかめない以上、ある筈がないのだ。だがしつぽがない仕事師といふものがあるのか——影のない人間がよ。すると、彼奴は、只無闇にかけ廻つてゐるだけで實は何にもしてゐないのかな、いや〳〵彼奴は、何かたくらんでゐる。……なんてわからねえ奴だ。」

外にけたゝましい號外賣りのどら聲。マノニロフは女給に命ずる。女給が號外を買つて持つて來る。

「オヤ〳〵又負けてゐやがる。なんて又、だらしない兵隊共だ……ふん、クロバトキン將軍曰く、豫定の退却……だと……ふん。」

六月十五日、得利寺の戰報だ。

「旦那！」

ヨーハンが、外からは入つて來て、マノニロフの肩をたゝく……。

「なんだ、ビツクリするぢやないか。」

「へツへツへツ……旦那、素敵なべつぴんが尋ねて來てゐますぜ。」

マノニロフは、女が好きだ。殊にカテリーナが、大佐におくつたいやな手紙を見て以來、別

居同様にしてゐるので、今は新しい異性の刺激をほしがつてゐる。彼には各地に色々の情婦がある。その情婦の一人が訪ねて來たのだ。

「こんな時は女に限る」

と思う。

「こゝに連れて來い。」

「いゝかね旦那、なんだか、まじめな用がありさうですよ。」

「構はない。つれて來い。」

ヨーハンはニヤリとして出て行く。やがてヨーハンは一人の女をつれて來た。女は、ギラ〳〵と物ほし氣に、にぶく光つてゐる小さなマノニロフの目を見ると、ハツと立ち止まつた。

その目でじつと、女を見てゐたマノニロフは、やがて、獵奇の聲をあげた。

「おう、お前は、サーシヤぢやないか。」

「マノニロフ、あなたは、なんてざまです。」

女は強く厳然と叫んだ。

「え、え、え、……な、なんだつて……」

マノニロフは、わが耳を疑ふやうにつぶやいた。サーシヤの、この高壓的な態度は、マノニロフにとつて、まさに晴天に霹靂だつた。それは今から約七ケ月以前、日露が未だ開戰に至らなかつた十一月の或日のことだつた。一人の色青ざめた女が、露都の秘密探偵局本部を訪ねて來た。その應接に出たのがマノニロフだつた。

女は、身分證明書を出して、自分を秘密探偵に使つてくれるやう嘆願した。踊り子だつたといふその女は、いかにも、きやしやで、弱々しく、到底、敏速と強い意志と、決斷を要する、秘密探偵の役がつとまりさうになかつた。マノニロフは、一たんは、なだめて歸さうとした。しかし、女は意外に熱心だ。

「サーシヤとやら、探偵といふものは。ダンスとはちがつて、色々の困難がふつてくる。いや、いつ命を絶たれるか知れぬといふ危險な仕事だ。諦めてはどうだ。」

マノニロフはなだめた。

「いえ、いかなる困難も厭ひません。命なんか惜しいとは思ひません。しかし、只一つ望みが

あります。それは、日本の間諜に對抗することです。」

「えッ！」

「マノニロフ樣、あたしは、日本に深いうらみを持つてゐるものです。」

彼女の熱心と、わけありさうな言葉と、そして彼女の美貌は、遂に、マノニロフを動かし、彼の推薦によつて、女は、遂に採用されることになつた。そして間もなく、探偵局長の命により、或る特別の任務を帶び、他の一名の探偵と共にオランダに潛入したのである。この女が明石大佐のために誘惑され、遂にリユテリヤン墓地近くの森の中で命をおとした參謀大尉ズバトフの戀人、踊り子サーシヤであることは言ふまでもない。彼女は、日本に對して復讐をちかつたのだ。

彼女が、オランダに行つてからのことはマノニロフが在露當時のことだつたので、彼は何にも知らなかつた。そして、開戰と同時に、行きちがひに、サーシヤは本國へ、召還され、マノニロフは外國へと出張を命ぜられたのである。

「マノニロフ、直ぐ私と支部にお歸んなさい。」

サーシヤは、まつ直ぐにマノニロフを見て言ふ。マノニロフは、一時カツとしたが、元來、氣の廻りの早い彼のことだ。何か、この女が威張るだけの理由があるにちがひないと、氣をとり直して、すなをに、サーシヤの後について、酒場を出た。サーシヤは、あきれてゐるヨーハンに鋭い一瞥をなげた。ヨーハンは、何となく、この女が煙たく思はれた。

露西亞秘密探偵局、パリー支部の二階の一室。(もちろん、こんな名前は出てゐない。出たらめな門札が掲げてある)

「おう、サーシヤ久し振りだつたなあ、さあかけてくれ。……なに一寸、くさ〳〵してゐることがあるもんだから、一ぱい、チカリとやつてゐたところだ。時にその後はどうだ。一體、又何しに、パリーにやつて來たんだ。」

マノニロフ得意の、打ちとけ戰法。しかしサーシヤは、ニコリともせず、つつ立つたまゝ、一通の書類を、彼の前につき出した。

「これを御覽なさい。」

「えつ！」

マノニロフは、手にとつて目を通す。政府の命令書だ。サーシヤを、露國以外の歐洲各都市における秘密探偵の總監督に任ずるといふ辭令だ。

マノニロフは、眞に驚いたものか、やゝ青ざめた顔で、サーシヤを仰ぎ見た。

サーシヤは、はじめて、ニツコリして、とろけるやうな目で、マノニロフを見た。

「マノニロフ、今まで、あなたが、どの位無能であつたかは、こゝで私は問はないことにしたい。あなたは、私を世話してくれた恩人だからね。その代り、これから、うんと働いて貰いたいわ。私は澤山な仕事を持つて來た。あなたは、きつと、婦人を尊敬することの出來る立派な紳士だと思うわ……」

あの時とは、まるで見ちがえるやうな、妖艶、凄美、マノニロフは、ゾツとして心でつぶやいた。——なんて凄い女になつたんだらう。こいつあ、たしかに俺より上だ。彼は、すつぽり、かぶとを脱いだ。

「サーシヤ、昔は昔、今は今、わしは、何事も、君の命令によつて働く……」

「有難う、では早速、第一明石大佐の行衛を探索すること、第二追放者の監視。これに全力を

注いで貰ひたいわ。」

マノニロフは、一寸暗い顔をしたが頭をさげてうなづいた。

5

シリヤクスが、第一に會見をすゝめたのは當時ロンドンに潜伏してゐた、社會革命黨の主領チヤイコフスキーであつた。大佐はもう躊躇しなかつた。參謀本部の了解はすみ、資金は與へられた。もはや後顧の憂ひはたゝれたのだ。

チヤイコフスキーは、グリーンウイツチの小さなホテルに棲んでゐた。彼は社會革命黨の最高元老で、年輩も風采も、たしかにそれだけの貫錄が具はり、廣い光る額は、運動家といふよりも、思想家の風貌を思はせた。室内は本でうづまつてゐた。テーブルには、書きかけの原稿がのせてあつた。

大佐は、挨拶したゞけ、あとはシリヤクスが運動の經過をのべた。チヤイコフスキーはニコニコして聞いてゐた。大佐は、この人物には、もう何も言ふ必要はない、何もかも充分承知し

てゐる。しかし、何か困難なことがおこつた場合、眞に自分達を救ひ出してくれるのは、この男だと思つた。

彼も亦運動については多くを語らなかつた。彼の意志はもう、充分に書簡で語られてゐるし、それ以上言ふ必要がないことを、彼自身も知つてゐるらしかつた。要するに、彼は昂奮しなくても、なすべきことはなし得る人物なのだ。

シリヤクスは、ひとりで昂奮して話してゐたが、やがて氣がついて、

「先生のやうな方ばかりだつたら、實に何もかもうまく行きますけれど……」

と言つて言葉をきつた。

「いや、さうではない。人間には色々ちがつた者があるので面白い。」

チヤイコフスキーは答へた。そして、そのちがつた人間が、集まつて、自由で、幸福な世界を組織するところに、人類の妙味がある。人間を劃一的に見やうとする、マルキシズムの社會觀は、決して面白いものではないと、彼の哲學を述べ、

「個人の絶對の自由が、しかも社會の平和をみださず、平等が失はれない――――わしは、さう

したユートピヤを抱いてゐるのです。明石さん。東洋にはこんな思想はありませんかね」

と、始めて大佐に話しかけた。

「わが思ふまゝのことを行つて、しかも則を越えず――――といふことを支那の孔子といふ人が言つてゐます。東洋では、自由といふことも內的に考へてゐるやうに思ひます。」

大佐は答へた。

チヤイコフスキーは膝をのり出した。

「それ〳〵〳〵……そこだよ、シリヤクス君、東洋人は精神的だ。歐洲人は、自由といふことを、只政治的、經濟的にしか考へてゐない。ところが東洋人は、さうでない。彼等は精神的に考へてゐるのだ。わが思ふことを行つて則を越えず――――實にいゝ言葉ですね。」

シリヤクスが言葉をはさんだ。

「しかし先生、それは、酒嫌ひが酒をのまぬといふことにしかすぎないやうにも思はれますね。」

「いや〳〵」

チヤイコフスキーは頭をふつた。

「そこが白人流の考へだ。この言葉には大きな宇宙がある。宇宙の調和がある。そこまで人間の心が洗練されて始めて、われ等の新社會がやつてくるのだ。」

「すると、われ等の運動は、變なものになつて來ますね。」

「なに、さうではない。今の——とりわけ露西亞の政府は、自分勝手な法則をつくつて、この心の則といふものを破壞してゐるのだ。わしの考へでは則といふものは、人類の調和から生れたもので、自由を束縛するものではいけない。しかるにツアーの法律は、人民を搾取するための鐵鎖にすぎないのだ。先づ、これを打ち破ることが、今日では最大の急務です。先づ現狀を破壞して、人心を一新してから、わが思ふことを行つて、則を越えずといふ境地に導かねばならぬと思う。その點で、わが露西亞は、どの民族よりも、新社會建設に對して多くの血の犧牲を拂はねばならぬ悲しい運命にあるのだ。」

大佐は、チヤイコフスキーの顏に、ほんとに悲し氣な色がたゞようてゐるのを見てとつた。そして、露西亞民族の暗い運命が、血の臭ひをもつて、自分の胸にもせまつてくるやうに感じた。彼の冬宮爆發の主謀者セリヤホフ、モスコー皇帝車轉覆の主謀者ハルトマン、アレキサンダー二世の暗殺者ウエラヘレウスカヤも皆彼の門下生であつたのである。

最後にチヤイコフスキーは大佐に言つた。

「明石さん。あなたの强みはあなたが持つておられる東洋思想だ。あなたが單に軍國主義の一軍人でないといふことは、白人の誰よりも深く、自由とか法則といふものを身につけて持つておられることだ。あなたは誰とでもこの事について太刀打が出來るのです。」

大佐は强い感銘を受けて、この訪問を終つた。

七、レーニン

1

巴里へ！

大佐は、いよ〳〵本舞臺へ乘り出した。シリヤクスは介添え役だ。相手はチヤイコフスキーのやうな、何にもかものみこんだ人ばかりでないことは、シリヤクスの言葉でも察せられる。況して、大佐とは思想を異にする人達、その上、何よりも先づ理くつを先に立てる人間であることも、今まで聯合が行はれなかつたことからでもわかる。

出發の前夜、宇都宮大佐が訪ねて來た。

「明石君、僕は、君がうまくやることは信ずるが、彼等の中には、きつと無賴の徒もゐることと思ふ。老猾な奴もゐることだらう。よほど心をひきしめてやらないと、彼等に只いゝ汁をすはれるだけに終つてしまうおそれがある。」

「有難う、覺悟は充分に定めてゐる。めつたに彼等からしてやられぬつもりだ。」

「うむ。」

「槍一筋だよ。國を思うこと——只この一筋だ。この一筋を彼等が理解しなければ、一切が破裂だ。正邪善惡、僕はこれによつて判斷する考へだ。」

「うむ。」

「僕は、彼等を利用するといふ考へを棄てたいと思う。又彼等にも、僕を利用するといふスキを與へたくないと思う。國を思う熱情が、戰爭といふものを機緣として偶然結びついたといふことにしたい。しかしスキを與へないといふその覺悟は、一面彼等との爭鬪だ。彼等の武器が思想であれば、僕の武器は、武士道だ！」

「うむ、武士道！」

「チヤイコフスキーは、僕の強みを東洋思想と言つたが、僕から考ふれば、武士道だよ。劍の中にも宇宙を見るといふ、わが武士道の精神は、敢て、彼等の思想に負けないと信ずる。」

「明石君、樂しみにしてゐる。滿洲の野にはわが精鋭と、露の大軍とが戰つてゐる。そして、この歐洲には、思想と武士道との腹藝が演ぜられる。思ふに思想は、考へて組立てたもの、武士道は鍛練したもの……實に面白い戰爭だ。切に自重と奮鬪を祈るよ……」

かうした僚友の激勵と自信をもつて、大佐は、巴里へ出發した。

シリヤクスは、先づ、ノートルダム寺院近く、コンコルト廣場の裏にある自分のかくれ家に案内した。が大佐は驚いた。彼のかくれ家といふのは、堂々たる邸宅で、門札には、ゼームス某の名がかゝつてゐた。

彼は、妻君を引き合はせた。

「大佐、これはアメリカ人です。だから、私もこゝではアメリカ人になりすましてゐるのですよ。これは、巴里の社交界にも相當顔を出してゐるのです。だからこれからなにかにつけて、便利なことがあると思ひます。」

妻君は、すぐうちとけて、大佐を歡待した。そして、いつまでも、この家に、とまつてゐてくれるやうに賴んだ。しかし、大佐は、これを拒つて、ホテルについた。そのホテルは、かねて、在パリーの間諜と打ち合せておいた場所であつた。

かつて、ロンドンで雇ひ入れた一人――スリ專門の男、英人のチヤールスが待つてゐた。

「どうだ、露國の探偵局支部の模樣は？」

大佐は先づ問ふた。

チヤールスは答へる。

「油斷がならなくなりましたよ。一週間も前に、本國から一人の女がやつて來たんです。とてもやり手らしいですよ。」

「ふむ女が……ヨーハンはどうしてる。」

「相變らずです。しかし、あの男の務めも、もう終りに近づきましたよ。なんだか、あの女が目をつけてゐるらしいですよ。」

「ふむ、……」

大佐は考へる。

「何か、いゝきつかけをつくつてやりたいと思つてゐます。」

「それが宜い。ところで、君の仕事が一つ出來た。これは、ある筋からの依頼、といふより、實は前から謎になつてゐることだが、どうも日本の機密が――殊に、外交關係のものが、露西亞に洩れてゐるらしい。一つこれを調べて貰いたいのだ。」

「承知しました。」

チャールスは自信あり氣に一揖して去る。

大佐は電報用紙をひろげる。ストツクホルムへ、ベルリンへ、ペトロブルグに、大佐が設けた間諜へ向つての指令だ。ストツクホルムには長田中佐が殘り、代理として諜報を受けもつてはゐたが、大佐は、ロンドンに於ても、一日の半分は間諜網の操縱に費さねばならなかつた。從つて、どこにゐても、露國内の事情が手に取るやうにわかつてゐる。この點は、むしろ外國に亡命してゐる露の不平黨よりも、詳しいかも知れないのだ。

2

翌日、大佐は、シリヤクスと共に、ローレンス・メリコフ公爵を訪ねた。彼はシャンゼリヤ近くのリツツホテルに棲んでゐた。彼はアルメニヤ人で、アレキサンドル二世の宰相をつとめた元帥、メリコフの甥であつたが、彼自身は、アルメニヤ社會黨（ドロシヤク黨）の領袖で、フランスに亡命してゐたのである。

彼は既にシリヤクスから聯合の加入をすゝめられ、必ずしも反對ではなかつたが、シリヤクスが聯合の主意書に署名を求めた時、突如として異議を唱へ出した。

彼は言ふ。

「誤解して下さるな。わしは、決してこれに反對といふのではない。わしが抱いてゐる不安は、この聯合運動について、かへつて反動的に政府の壓迫が猛烈になることです。」

シリヤクスが反駁した。

「勿論反動は來るでせう。しかし政府の壓迫をおそれてゐて、果して革命運動が出來るでせう

か。」

「さう言はれると甚だ辯解に困る。けれども考へて下さい。われ等は決して當然蒙らねばならぬ暴壓をも逃避しようといふのではないが、他黨に對する壓迫までも、強いて分け前にあづからうとは思つてゐない。われ等とは思想目的を異にする他黨へ對する政府の暴壓を、この聯合において平等に負擔することは面白くないのです。」

「なるほど……」

大佐がうなづいた。

メリコフは、大佐のうなづきに力を得た。

「ね、大佐、國體の變革を目的とする社會革命黨、社會民主黨と、アルメニヤの自治、獨立を目的とするわが黨が、共同戰線を張つた時、その蒙る暴壓が、わが黨にとつて今日以上であることは明瞭な事實ではないでせうか。」

シリヤクスは、激昂した。

「ああ、メリコフ公爵、そ、そんな卑怯な態度で、よくも今日まで運動をつゞけられましたね。

あなた方は、あはよくば、政府にすがつて、アルメニヤの自治を獲たいと願つておられるのですな。しかしそれは夢ですぜ、卑怯者が抱く夢ですぜ。」

公爵の顏もさつと變つた。

「なに卑怯者ですと、わしが、いつ政府にすがると言ひました。」

「言はなくとも、さう思はざるを得ない。」

シリヤクスは立ち上つた。

「公爵あんたは卑怯者だ！」

「なにつ！」

公爵も立ち上る。わな〳〵と手がふるへる。

大佐は、きつと聲を强めた。

「兩君暫らくお待ち下さい。」

シリヤクスが、先づハツと自分に歸つて腰を下した。大佐は公爵に笑顏を見せた。

「公爵、どうか、私の意見もおきゝとり下さいませんか、第三者としての意見を……」

公爵も腰をおろした。

大佐はつゞける。

「公爵、あなたの御意見は、實に黨を愛し、國民を思ふ赤誠からほとばしつたものと思ひます。しかし、革命が成功した場合のことを考へて見ましたか」

「……」

「他黨が暴壓と戰ひ血を流して戰ひとつた自由を、あなたは、無條件で貰へると思ひますか。」

「……」

「それとも、あなたは、ドロシヤク黨一個の力によつて、望まれる自治が獲らるゝとお考へになりますか」

「……」

「あなたは、暴力、革命によらずして、自由が獲らるゝと信じておられますか。公爵若しさうお考へでしたら、それは非常なあやまりですぞ。」

メリコフ公爵は、ヂツと考へこんでしまつた。

一座沈默……。

メリコフは口を開いた。

「なるほど、御尤もなお言葉です。我が黨においても、次第に、暴力なくして自治が獲られないといふ考へに傾きつゝあるのです。しかし……」

「お待ちなさい公爵、私は、あなたのお心持ちがよくわかります。要するに、あなたは主意書に黨の名を掲げることに不安を抱かれると推察しますが、いかゞです。」

大佐は、ズバリと言つた。

公爵は顔をあげて大佐を見た。少し赤くなつてゐる。

「ヂ……實はさうです。大佐、私は、この聯合運動の成功に對して未だ多少の疑問を持つてゐます。かゝる際、主意書にわが黨の名前をかゝげることは、徒らに政府の憎惡を招くだけではないかと考へるのです。」

シリヤクスが言つた。

「公爵、この主意書は政府に配布するものではありません。絶對秘密の中に、只有志の目にだ

けふれるものです。この際、貴黨にこの主意書に名をかゝげて貰ふことが、他の黨派を聯合に誘ふ有力な力となるのです。」

「するとシリヤクスさん、あなたは、これが絶對に、政府にもれないと保證されるのですな。」

「公爵、それは、この明石が保證します。」

大佐の言葉は千キンの重みがあつた。公爵は、ぢつと大佐の顔を見上げた——さぐるやうな目で。大佐はアノすんだ眼を見開いたまゝ、またゝきもせず正面を凝視してゐる。

「よろしい、では私個人として署名いたします。黨としての態度はマルミヤンと協議の上、決定いたします。」

公爵は、ペンをとつて、主意書にさら〳〵と書いた。

——ドロシヤク黨總務委員

——ローレンス・メリコフ

3

夜、シリヤクスは、一人の壯年紳士をともなつて大佐のホテルを訪ねた。

「僕はデカノーシーといふもの。ゲオルギー國民社會黨のパリー委員です。」

その紳士は、シリヤクスの紹介も待たず、自分からから言つて握手を求めた。彼は黒いちぢれた鬚を持ち顔全體がいかにも精悍な氣にあふれてゐた。

「どうぞ、おかけ下さいデカノーシーさん、お名前は、シリヤクスさんから聞いておりました。」

大佐は、強く彼の手を握つてほゝ笑んだ。彼の朴訥な態度にほゝ笑みたいほどの痛快味を感じたのだ。シリヤクスもほゝ笑んでゐる。

「早速だが大佐、わしは、あなたの聯合運動には大々的賛意を表するものです。」

「お禮を言つて宜いか、どうかわかりませんが、非常にうれしく思ひます。一外人、しかも交戰國たる日本人の計劃に對して、よくも疑ひなく賛成して下さいました。」

デカノーシーは、大きな毛だらけな手をふつた。

「いや〳〵、お禮はこちらから言ふべきです。たとへ、あなたにどんなお考へがあらうと、革

命の機會を與へて下されば宜いのです。猪突――それ以外にわれ等の路はないのですから。」

「ゲオルギー地方の住民は、非常に勇敢だと聞いてゐましたが、あなたにお會ひして、なるほどだと思ひます。」

「はつはつはつ……」

デカノーシーは豪放に笑つた。

「我等の武器は、思想ではない、爆彈です。ピストルです。匕首です。そして得るところは、ゲオルギーの完全なる自治です。はつはつ大佐、われ等が求むるのは、革命黨が夢見る自由社會でも、民主黨がのぞんでゐる勞働者の天下でもありません、もつと〳〵手前にある自治です、民族自治です。世界のどの人種でも持ち合せてゐる自治です。その僅かな自治のために血を流さねばならないといふのは、大佐、なんと露西亞はのろはれた國でせう。」

「眞に同情します。しかし、たゆまざるあなた方の努力は、きつと酬ひられる時が參りませう。」

「デカノーシーさん！」

シリヤクスが横から熱のある聲で言つた。

「大佐は、眞によく、われ等の運動を理解されてゐます。しかも日本は、第二のゲオルギー、第二のフインランドたる朝鮮を救ふためにわが國と戰つてゐるのです。フインランドでは日本を理想の國家としてあこがれてゐるのですよ。」

「よくわかります。どうです。日本軍の強さは、勇敢さは、正に破竹の勢で露軍を破つてゐるではありませんか。わがゲオルギーの住民も、そこに立派な政治と、統率者があれば、決して他民族に負ける民族ではないのですが、たとへば、今日でも、武器です、資金です。これさへあれば、相當の効果をあげることが出來るのです。」

シリヤクスが胸をたゝくやうな風で受けた。

「デカノーシーさん、その點は大佐にお委せ下さい。大佐として、この運動に乘り出された以上、その點については充分考慮を拂はれてあるのです。」

大佐は、沈默。

デカノーシーは、滿足な顏。

「では、大佐。シリヤクスさん。主意書へ署名しませう。わが黨は、前にシリヤクスさんからこの話があつた時、巴里在住の黨員が參加を決議して、本國にはかつたのです。ところが、その回答が參りました。勿論參加です。」

彼は不器用な手にペンをつかんで、署名した。彼は歸つて行く、あとには、シリヤクスと只二人。

大佐は、ホテルの窓から、夜の大パリーを見おろした。明滅する灯の海、そびえる塔、この都市を舞臺として演ぜられた華々しい歴史的の事件、叛逆、謀略、市街戰、行進、その中に咲いたローマンス、さうしたものが、繪蒔物のやうに大佐の心に浮び出る。

明治三十四年、大佐が佛國公使館附武官として、始めてパリーの地をふんだ時のことが思ひ出される。大佐は、靜かに口ずさんだ。

都人追レ景弄二閑餘一
滿街紅燈映二翠輿一
吾愛英雄千古月

凱旋門下讀二兵書一

「實に、いゝメロディーですね。大佐、それは何といふ歌ですか。」

シリヤクスが、うつとりとたづねた。

「これは三年前、私がつくつた詩です。日本では、、かうした風に朗詠するのですよ。」

「おう、それを、一つ譯して聞かして下さい。」

大佐は、これをフランス語に譯する。

「うむ、面白い、大佐。あなたの面目がをどつてゐる。あなたは詩人ですね。」

「なに、日本人は誰でも詩を作るのです。」

「さうですか、日本人は實に驚嘆すべき國民ですね。かうした國民にとつては戰爭も亦一箇の詩でせうね。」

大佐は答へず、又口づさんだ。

城中夜半聽二鷄鳴一
蹴レ枕窓前對二月明一

思結鴨江營裡夢

分明一劍斬二長鯨一

一九〇四年二月五日、日露國交斷絶の日、ペテルブルグで賦した自作の詩であつた。

シリヤクスは目をつぶり、腕をこまねいて、ソファにもたれてゐる。

4

朝から、間諜のチャールスが訪ねて來た。

「どうだ、まだ例の件はわからないか。」

「一切わかりませんが、どうも、あの女があやしいです。ヨーハンに聞くと、何でも秘密探偵の總監督だといふことです。三日前のことです彼女に尾行しましたら、口入屋に入つて行つたのには驚きましたよ」

「ふむ、口入屋……どこかに棲みこむつりもだな。」

「その通りです。やがて彼奴ア、口入屋の親爺と、一しよに馬車で出かけましたよ。わたしも

後から馬車で追ひますと、コンコルト廣場の裏にある、ジェームスといふ立派な屋敷には入つて行きましたよ。」

「なに！」

大佐は一寸顏色を變へたが、すぐ何かに思ひついて、ニツコリした。そしてチャールスの手をとつた。

「チャールス、君に感謝する。」

「えつ！」

「そのジェームスといふのは、いつかお前がゐる時來合はせた、アノ白髯の紳士なんだ。その紳士が歸つて行つたすぐあとで、お前が僕に言つた言葉を覺えてゐるか」

「え覺えてゐますとも、――あの紳士は何か內ポケットに重要なものを持つてゐますね。あんな風だと、直ぐ目利きのスリにつけられます――かう申しました。」

「うむ、さうだつた。だから僕はなんだか不安になつて、翌日、アノ紳士があづかつてゐる書類を、改めて僕が保管することにしたんだよ。もしかすると、例の女は、その書類をねらつた

のかも知れない。さうでなくともきつとその書類を見つけ出して盗んだにちがひない。しかし、女が、アノ紳士の正體を嗅ぎつけたのは事實だ。早速、電話で知らせよう。」

「電話では危險です。」

「うむ、危險だ。お前行つてくれ。それが宜い。が、僕もこゝにゐてはあぶない。第二の場所に移らう。ひよつとするともう尾行がついてゐるかなあ。……」

その夜、大佐は、周到の注意の中に、かねて用意した、凱旋門近くのホテルに轉居した。一方チャールスが行つた時、女はもうシリヤクスの家にはゐなかつた。しかし、それ以來シリヤクスは、とかく尾行にねらはれがちであつた。彼は、パリーの社交界における地位を失ふことを欲せず、轉居して身をかくすことをなし得なかつたからだ。がこれは斷じて虚榮からではなく、後の便宜を思つたからであつた。

今日まで、大佐が直接領袖に會つて意嚮を確めたのは、ポーランド國民黨は別にして社會革命黨、アルメニヤのドロシヤク黨、ゲオルギー黨であつたが、當時、露國において最も勢力を持つてゐたのは、社會革命黨と、社會民主黨の二つであつた。そして又、確固たる社會思想を

背景としてゐるのもこの二大黨で、他は、民族的の自治獨立といふことをその根柢としてゐたのである。たゞしその運動方法はむしろ自治黨の方に凶暴猛烈であるものが多かつたが。眞に露西亞帝國の基礎をゆるがすものは、この二大黨に他ならなかつた。

社會革命黨は既によし。シリヤクスは、この黨に知己多く、思想も亦これに近づきつゝあつたので、自然、この黨を中心として聯合をすゝめたのであつた。しかし、大佐もシリヤクスも望むところは、この二大黨の連繫である。ところで、その當時、パリーには、社會民主黨員は皆無であつた。

彼等はどこに――彼等民主黨の亡命家達は、大佐の手記をかれば「白山の雪に對し大湖の水に臨むところ、」即ちジュネーブの片田舍、シュメンドローズリーに表面文墨を弄び、ひそかに内露の黨員と策應しつゝ機の至るを待つてゐたのである。

フランスのアナキスト、キーヤールが、彼等のかくれ家を知つてゐた。いざスウイスへ！

大佐はパリーを後にした。シリヤクスと行を共にしなかつたのは、露の間諜に尾行されるおそれがあつたからだ。千九百四年七月下旬のことであつた。

5

ジュネーヴ！　千古の雪に磨かれたアルプスの峻峯と、すみきつた大氣と、緣濃き牧場と、そして紺青の湖水を持つた山上の都、世界の遊園地ジュネーヴ、そのジュネーヴは又國を追はれた人達にとつて、こよなき遁れの町でもあつた。もと〳〵スウイスといふ國そのものが、その小さな國内にイタリヤ系、フランス系、ドイツ系の三種族が、各々固有な言語と宗教と風俗とを保持しつゝ、しかも極めて圓滿に協同生活を營んでゐる。かうした空氣は、他國の亡命者を包容するに暖いものがあつたであらう。

そのジュネーヴの美くしい町影にかくれた草深い別莊村、シユメンドローズリーには、社會民主黨のレーニン、ブレハノフのほかに、ドロシヤク黨の主領で雜誌ドロシヤクの主筆マルミヤン、社會革命黨の老女傑ブレシユコブスカヤ女史、ブンド黨の某首領等も潛伏してゐた。

大佐は先づ、マルミヤンに會つた。彼は首領だけに風采態度共に堂々たる紳士で、教養も深かつた。大佐が、メリコフ公爵との會見の顚末をのべると、一々、公爵の態度にうなづき、自分もその通りの意見だと述べ、必ず近いうちに、黨としての態度を表明すると言明し、彼も個人として主意書に署名した。

次ぎにプレシユコブスカヤ女史を訪ねた。女史は、非常によろこんで大佐を迎へた。勿論、聯合運動には大贊成で、女史は過去の經歷を語り、將來を論ずるうちに、顏にはいつしか紅潮がみなぎり、大佐が思想を異にしてゐることも、外國人であることも忘れ、恰も同じツアーの壓制の下にある同志に對するやうに、話を進めて行くのだつた。そして時々、ふとその事に氣がついて、處女のやうにはにかんだ。

「おう、アカシ、あたしとしたことが……でも、あたしは、あなたを同志と呼びたいのですよ。」

大佐は、この勇ましい婦人から、かう言はれるのが何となくうれしかつた。大佐はこの老女に、母のおもかげを、日本の烈婦の風格を感じたのだ。

「どうぞ〳〵私を、同志と呼んで下さい。プレシユコブスカヤさん、抱いてゐる思想は、天皇陛下を戴いてゐる私としてあなた方とちがつてゐるのは當然です。しかし、若し私が露西亞に

生れてゐましたら、きつと同じ思想になつたでせう。又あなたが日本に生れておられたら、私達が尊敬してゐる忠臣烈婦となられたこと〻思ひます。」

大佐は、われにもなく感傷的な氣持ちになつて言つた。

「さうです〳〵」

女史はうなづいた。

「私達、クロポトキンやバクーニンそしてチャイコフスキーなどが抱いてゐる理想社會が今日直ちに來るとは、私も考へてはゐません。それは、遠い〳〵未來でせう。それまでは國により、民族により歩いて行く道はそれぞれです、あなた方日本は、先づ露西亞の軍隊を打ち破りなさい。私達革命黨は、ツアーの政治を破壞します。思想の檢討は、その後で宜い。私達の思想が正しいか、レーニン等の思想が正しいか、それを、判斷するのは、露西亞民族自身です。又それからの日本がどんな道をたどるか、それも日本民族自身が決定するのです。」

大佐は頭を垂れて謹聽した。深い民族への愛と、長い間の經驗から物を言ふ老女史の言葉には、どこかに人を惹きつける力がひそんでゐた。

「あなたは、レーニンに會ひますか。」

女史は、最後にかう言つてたづねた。

「え、是非會つて意見を聞きたいと思ひます。」

「さうなさい。あの男は一寸偉いところのある人物です。しかし、彼は、この聯合運動に就いて何といふか……」

女史は一寸不安な顏をした。

大佐がいとまをつげると、女史は一二町も大佐をおくつて出た。そして指して、レーニンが棲んでゐるといふ森影の家を敎へてくれた。暫らく行つて後を見ると、女史はまだ立つて大佐を見おくつてゐた。

6

明石の名は既に、レーニンは報告を受け、大佐が聯合運動を策してゐることも知つてゐたので、刺を通すと、レーンはすぐ書齋に大佐を招じた。

初對面の挨拶を交してから、二人は暫らく默つて向きあつてゐた。しかしそれは、第三者が見ても、氣まづい沈默ではなかつた。レーニンは、大佐に對して、たしかに興味は抱いてゐたにちがひなかつた。しかし、彼は決して、あからさまにその感情を現はさなかつた。大佐は、その書齋にこめてゐる靜かな、しかし、ひきしまつた空氣を非常に氣持ちよく感じた。

「いゝおすまゐです……」

大佐が口を開いた。

「スウィスは始めてですか」

レーニンが言つた。

「三年程前に一度參りました。私がフランス公使館附の武官をしてゐた頃です。」

「ロシヤには、いつ行かれたのです。」

「千九百二年の二月でした。」

「すみ心地はいかゞでした。」

「實にいゝところでした。」

レーニンは一寸間をおいて言つた。

「とう〳〵始まりましたね。」

彼は、ひらりと日露の戰爭にふれた。

「さよう、……あなたは、シベリヤを御存じでしたね。」

大佐は、少しひきはなした。

「知つてゐます。」

レーニンは、シベリヤに流滴され、千九百年の一月シベリヤから歸つたのだ。

「露軍はしきりに豫定の退却をつゞけてゐるようですね。」

大佐が、ついと前に出た。

「あなたの聯合運動のことは聞いてゐました。」

果然、レーニンが、問題にふれた。

「是非御意見を伺ひたいと思ひます。」

大佐が突いて出た。

「豫め考へて見ました。」

レーニンは正直に受けた。

「……」

大佐はあせらず待つた。

「日本として、この點に着目するのは當然だと考へます。」

大佐は、内心ヒヤリとした。――彼が考へたといふのは、彼自身のことでなく、自分の心持ちだつたのか！

「理解して戴いて滿足です。」

大佐は、退いて守つた。

レーニンは追はず一轉した。

「勿論、日本の我等に寄せた好意に對して拒絶する理由はないと信じます。」

「……」

大佐は猶、陣を進めず、先を待つた。

「しかし、わが黨として、いかにこれを……」

言ひさしてレーニンは一寸言葉につまつた。

（利用！）この言葉がさつと大佐の心に響いた。しかしレーニンは、何氣なくつゞけた。

「……お受けするかは、あなたも熟考していたゞきたいと思ひます。」

沈默！　可なり長い沈默！……。

大佐の顏は、次第にひきしまつて來た。これに應じて、レーニンの目も熱を帶びて來た。いきづまるやうな空氣が、初めて室にこめた。

大佐は假面をかなぐり棄てるやうに、きつと口を開いた。

「貴國革命の成否は……」

「必ず近い將來に……」

「うむ……」

レーニンの顏には快心のほゝ笑み、大佐はしばらく目を据ゑて沈思したが、やがて、ほがらかな顏を相手にさらした。湖水を渡る風が、卓上の本のページを繰る。二人は、窓を見る。森

を通して湖面が光る。白いヨットの帆が走る。颱風一過、二人は上氣嫌、のどかな會話。

「大佐、お氣に入られたやうですね。」

「大變氣に入りました。」

「いつでもお立ち寄り下さい。そのうちにブレハノフ君も歸つて來ます。」

「伺ひますとも……なるだけ一人で……」

「それが宜いですな。」

「シリヤクス君を御存じですか。」

「知つてゐます。あなたの協力者ですね。」

「さうです。なるたけ相談することにしてゐます。」

「なるほど……」

「なるだけです……彼は立派な人物ですよ。」

「さうでせう。」

二人は、次第にうちとけて行つた。そして閑談數刻、大佐は、夕陽をあびて歸途についた。

しかし、行くこと數町、湖畔、レーニンの家の森が見えなくなつた時大佐は、はたと足を止め、初めてほつと息をついた。

「偉い奴だ！」

大佐は、うなるやうにつぶやいた。大佐は今まで、かほどの人物に會つたことはなかつた。いやそれは決してレーニンが誰よりも偉いといふのではなかつた。チャイコフスキーがレーニンより偉くないとは思はなかつた。あのチャイコフスキーの深い理解、熏り高い思想溫蓄、それは人間として或はレーニン以上の偉大さを示してゐるのかも知れなかつた。

大佐が、レーニンに對して感嘆の唸りを發したのは、その人物の型であつた。その冷靜、その透徹した理智、しかも底に火の如き情熱を抱いてゐるらしい、彼の風格は、恰も、火力をもつて動く、精巧な機械を思はせるものがあつた。

感情に訴へて彼を動かすといふことは、(假へその感情が最高のものであつても)到底のぞめないことだつた。大佐は、最初ロンドンを出る時、非常な自信をもつて、決して彼等に自分を利用するといふ隙を與へないと、僚友宇都宮大佐に斷言したが、レーニンに對してだけは、遂

にその戰法を棄てねばならなかつた。

（お互に利用しあふ、）これ以外に、レーニンを動かす方法はないのである。

しかし、大佐はこの會見に滿足した。それは全く息づまるやうな接戰ではあつた。けれども、レーニンが打ちこむ太刀、受ける刄に一本の無駄がなく、ごまかしがなかつた。情にからむ卑怯さもなければ、甘い感激もなかつた。しかも、遂に、彼は、ガラリと大刀を棄てゝ、胸底の一物をのぞかせたのだ。

大佐は、レーニンとの會話を心にくり返した。レーニンが、聯合運動を承認しながらも、

「わが黨として、いかにこれをお受けするか、あなたも熟考していたゞきたい」

と言つた時、大佐はなぜ默りこんだか、なぜに二人が緊張したか、なぜに又大佐は、

「貴國革命の成否は？」

ときゝ、レーニンが、

「必ず近い將來に……」

と答へ、それによつて、この重大な問題が打ち切られたか？　その解決は、今暫らく謎とし

て、二人の胸底に秘しておくことにしよう。

やがて、明るい笑みを浮べた大佐は、快心の試合をしたあとのやうな、心の充實に足をふみしめ、湖に沿ふた芝生の道をしつかりと歩き出した。

八、アムステルダムの喜劇

1

レーニンとの會見を終つた大佐は、その近くにブンド黨の首領等もゐたが、わざと彼を訪ねなかつた。ブンド黨はユダヤ人勞働者の秘密結社で、社會民主黨の別働隊であつたからだ。

大佐は直ぐ汽車で、スウィスの中部を横斷し、ドイツに接したチユウリツヒ市の附近にある小さな町ラペルビールに飛んだ。そこには、ポーランド國民黨の首領バリスキーが潛んでゐた。バリスキーとシリヤクスとは既に一度會見して大佐を停車場まで迎ひに寄こすやう打ち合せてあつた。

湖水から流れ出るリマト河にのぞんだ小さな停車場――。

大佐は、おり立つて見廻した。たしかに自分を迎へに來てゐると思はれる鋭い目をした青年が立つてまぢ〳〵とこちらを見てゐる。しかし、シリヤクスのかくれ家が露の女探偵に嗅ぎつけられて以來、大佐の探偵に對する警戒は可なり細心になつてゐる。さうでなくとも、未知の人間にこちらから無暗に話しかくべきでない。大佐はしばらく默つて突つ立つて先方から問ひかけるのを待つた。しかし、先方も默りこんでゐる。大佐は、危ぶみながらもきいて見た。

「M町の四十五番地はどのあたりでせうか。」

大佐が訪ねる家は五十三番地だつたが、大佐はわざとかう言つた。

その男は、何でもなく答へた。

「M町の四十五番地ですか、前の道を右へ折れて行きますと、川ぶちに出ます。一町ほどすると橋があります。その橋を渡つて向ふの町が三十番地です。その裏が四十番から五十番臺になつてゐます。」

大佐は諦めた。

「有難う。」

から言つて歩き出した。

暫らく歩くと、まぎらはしい四つ角に出た。大佐は、立ちどまつて考へた。

と、誰だか後から聲をかけた。

「もし、M町は、手前の道を行くのですよ」

あやしんでふり返ると、さつきの男が立つてゐる。大佐は、よつぽど、バリスキーの名を出して見ようかと考へたが、相手があまり、冷たんな顔をしてゐるので止してしまつた。又しばらく行つて振り返ると、その男が直ぐ後を歩いてゐる。

あやしい奴だ！　大佐は疑ひ始めた。

大佐は歩きながら、幾度もふりかへつて見た。矢張りゐる。目的の五十三番をすぎて、ふり返ると、その男は同番地のある家には入つて行つた。不審に思つてその家の門札を見ると、バリスキーの變名がかゝげられてあつた。

「なんだ、やつぱり迎への者であつたか。」

大佐は、自分の過敏さを笑ひながら、その家の玄關に立つた。案内を乞ふと、さつきの男が出て來た。

「さき程は失禮いたしました。主人が待ちかねてゐます。どうぞおあがり下さい。」

その男は叮嚀に頭を下げて言つた。

大佐は、だまつて主人の居間に案内された。

「迎への者が、役に立たなかつたさうで……」

バリスキーは笑つて言つた。

「はツはツ……いやこちらが悪かつたのです。」

大佐も笑つた。

「あの青年は、ごく田舍者で、日本人といふと失禮だが、黒奴だと思つてゐたさうです。それに、あなたが違つた番地を言はれたので、わからなかつたらしいのです。しかし、なか〳〵用意周到ですね。」

「露西亞のスパイは實にうるさいですからね」

「全くです。だからこちらも、つい要心しすぎてこんな失敗をやらかすのです。」

しかし、この一寸した喜劇は、忽ち二人を打ちとけさせた。話はすぐ聯合運動に移り、バリスキーは、遠慮なく自分の意見を述べた。

彼は言ふ、――――

「わが黨が、露國政府に持つ怨みは、決して、他のいかなる黨派にも劣りません。しかし、その運動方法については、わが黨獨特の見解を持つてゐます。御承知の通り、ポーランドにはわが黨のほかに、社會黨がありまして、ポーランドの自由を目標として戰つてゐますが、彼等のは、只反抗のための反抗でして、事毎に暴擧に出るので、政府の暴壓を增すばかりなのです。そのために、かへつてポーランドの獨立を、遠くに追ひのけてゐる狀態です。わが黨としては、過去の苦い經驗から見て、かうした蠢動を排し、一氣に獨立を成就すべきと考へてゐます。若し一敗地にまみれることがあれば、政府の暴壓は一層甚だしくなり、それにドイツによつて、侵略されるおそれも充分にあるのです。ですから、わが黨として當面の事業は、ポーランド住民の覺醒を促すことです。國民的自覺です。國民の全部が、この自覺に到達した時は期せ

ずして獨立が成就すると信じます。」

大佐はたゞすやうに口を開いた。

「しかし、露國内にはもちろん、他の屬領にも露國政府を敵として戰つてゐる黨派もあるのですから、彼等と協力することは、ポーランドの獨立を近くに導くことゝ思ひますが。」

「いや！」

バリスキーは強く首を振つた。

「ポーランドの獨立は、只ポーランド國民によつて成しとぐべきです。」

「果してそれが可能でせうか。」

「可能でも不可能でも、かうしてかち獲た獨立でなくては、決して國民は幸福でないのです。あなたは、まだ露西亞人を知らない。陰險で恩知らずで、我利々々で、あんな奴等と事を共にして御覽なさい。終にはこちらが脅おひなげを喰ふにきまつてゐます。」

「しかし、現在運動に從事してゐる人達は！……」

「いや〳〵、彼等とて同じです。同じ露西亞人の血が流れてゐます。大佐お考へ下さい。今ま

でわれ等ポーランド人が露西亞人から受けた民族的侮辱、暴壓、詐欺を思つて下さい。われ等は、社會黨の人達と言へど信用するわけには行きません……大佐われ等が憎むのは露西亞の政府だけではないのです。露西亞そのものです。」

バリスキーの顏は、憤懣にひきゆがみ、目は憎惡に燃えた。彼は猶つゞける——

「大佐、われ等が求めるのは、單なる自治ではありません。完全なる獨立ですぞ！ 社會黨の綱領によれば、ポーランドの自治以上に出ないのです。單なる聯邦となるにすぎないのです。われ等が露國內の不平黨と協力したくないのも、この點です。我等は完全に露國の絆を脫して獨立國家を造りたいのです。たとへ、露西亞の帝政が覆滅して、社會主義の國家にならうと、われ等はその支配下に滿足しないのです。」

大佐は謹聽した。彼の言葉には多くの共鳴すべきものがあつた。大佐は目をつぶつて考へこんだ。が、しばらくして見開いた目はカツと輝いた。

大佐は膝を進めて斷言した。

「よくわかりました。私は今日よりポーランドを露國版圖內の一地方と考へるのを止しませう。私は今日よりポーランドを獨立國家として考へます。バリスキーさん！」

大佐は、ぢつとその目で相手を見つめながら强くつゞけた。

「バリスキーさん！ わが日本帝國と握手してくれませんか？」

「なに日本帝國と！」

「さうです。今度我等が劃する聯合運動の結果が直ちに露西亞帝國の崩壞となるならぬはしばらくおき、將來、わが日本帝國はポーランド獨立について一びの力をお添えいたしませう。不肖明石、一武官にすぎませんが、天皇陛下の命を受けて、この事業にたゞさはつてゐるものです。私の一言はまた國家の言葉です。わが帝國は、決してこれを反故にはいたさないと確信します。」

嚴然たる大佐の態度、まじろぎもせぬ眼球、バリスキーは、半驚異の面持ちで大佐の言葉を味はつた。長い間……

が、やがて、彼は步み寄つて、ひしと大佐の手を握つた。

「大佐、感謝いたします。よくも私の頑固な氣持ちを了解して下さいました。そして、その了

解の中から、ほとばしり出た、あなたの一言！　大佐、私は感謝します。これから一切の行きがゝりを棄てゝ、あなたの聯合運動に參加しませう。大佐、私はあなたの一言を信じます。百萬の味方を得た以上のよろこびを感じます。どうか、將來、露西亞帝國が崩壞した時、わがポーランドを、完全に露西亞の版圖から脱出出來るやう、日本帝國の援助をお願ひいたします。」

大佐は相手の太い手を握り返した。

「バリスキーさん、私は日本武士の面目にかけてその事を誓ひます。今日まで日本軍は着々と戰勝をおさめてゐます。しかし、全局の勝敗は今後です。しかも、それはかゝつて、露國内の事情にあるのです。あなたが起つて背後の攪亂にあたられる御苦心は、わが日本帝國としていつまでも忘れることは出來ません。」

「ああ、實に、今日は紀念すべき日だ。大佐、われ等と雖ど、露帝國の崩壞と、ポーランドの獨立が不即不離の關係にあることは認めてゐるのです。しかし、只、露人の狡猾なる心情を知る私達は、將來革命成就の曉においても、猶、わがポーランドを隷屬せしめやうとすることを恐れ、手を握ることを躊躇してゐたのです。が、あなたの一言によつて私達は、躊躇なく、

彼等と一時手を握る決心がつきました。」

バリスキーは、かう言つて、いつまでも大佐の手を握りしめてゐた。

後年、革命が成功して、露西亞帝國が崩壞した歐洲大戰の當時、日本が寄せたポーランドへの同情は、決して只ボルシエビキへの反感ばかりではなかつたのである。言ふまでもなくポーランドは、現在獨立した國家を營んでゐる。

2

大佐はベルリンに直行して、アムステルダムの、第二國際社會主義大會の開會を待つた。レーニンと會談の折、近く彼も出席する旨を話し宿泊する宿も告げたので、大佐は、レーニン、ブレハノフに會ふのが目的だつた。

いよ〳〵開催されるといふ日、大佐はベルリンを立ち、オランダに入り、即日、レーニンの宿を訪ねた。夕方だつた。暗い階段をのぼつて行くと、すぐレーニンの部屋があつた。部屋の中には下等な煙草の煙が、もう〳〵と立ちこめ、その煙の中に、レーニンが熊のやうにうづく

まつてゐた。

二人の間の了解作用は、別れてからも、どんどん、心の中で進行してゐたので、今度は何の不自然さもなく、きはめて、ぞんざいな挨拶で始まつた。事實、心の底の底まで見とほしあつてゐる二人だつた。表面の儀禮、武裝などは何の役にも立たないのだ。

「やあ、わるい煙草をすつてゐるですなあ、レーニン君。」

大佐は、いきなりかう言つて、顏をそむけたが、すぐポケットから、自分の煙草を取り出してテーブルにおいた。

「やり給へ、少しは上等だ。」

レーニンは、申しわけに大佐が出した一本の煙草を、一口すつて消した。

「勞働者は、上等の煙草のにほひに、搾取階級の臭氣を感ずる……僕達は愼しんでゐるのです」

「ふむ……」

大佐は感嘆をおしまなかつた。

社會民主黨は、主として勞働者を黨員としてゐるのである。この細心さを持つレーニンは、これだけでも、勞働階級の中に人氣をかち得る資格があると思つた。

レーニンは身を起して、

「大佐、君はカタヤマ・センといふ人を知つてゐますか。」

「カタヤマ・セン……え、名前だけは、彼は日本の社會主義者で、非戰論を唱へた數名の中の一人です。」

「彼が、この大會に來てゐますよ。」

「さうでしたか……」

大佐は知らなかつた。

「そして、彼は、副議長にえらばれ、今日は壇上で、ブレハノフ君と握手したのです。」

「どういふ意味です。」

「日露兩國の帝國主義者は、滿洲で戰つてゐるが、民衆は、かく平和を求めてゐる。——といふわけでせう。」

レーニンはにやりとして答へた。

大佐もにやりとした。

「あなた方の主義は戰爭を否定するのでしたね。」

「まあ、さうです。」

「しかし戰爭も面白いぢやありませんか。」

大佐は、くすりと笑つた。思想の表面だけを見て、非戰論を唱へ、わざ〳〵こゝまで出かけて來た、ズングリしたその日本人の間ぬけな顏がひよつくり心にうかんで來たからだ。

（コツ〳〵）

ノツクの音

「おは入り……」

レーニンが應へると、一人の老紳士がは入つて來た。ブレハノフだつた。レーニンが簡單に紹介した。二人は固く手を握りあつた。

ブレハノフが口を開いた。

「大佐、今日は面白い日でした。日本人との握手は、あなたで二人目ですよ。」

大佐は軍人らしく、まつすぐに、相手を見て言つた。

「その二人の手にどこか違つたところがありますか。」

「左樣……」

ブレハノフは一寸考へた。

「彼の手は小さくてやはらかでした。あなたの手は大きくて固い。理想と現實と申しませうか……」

大佐は少し反撥した。

「私には、彼が非常に滑稽に思はれます。彼は、彼自身を代表してゐるだけで、彼以外、日本國民の只一人の代表でもないのです。」

「それは確かに事實でせう。」

レーニンが横からうなづいた。

大佐はつゞけた。

「しかし、、日本として露國内で非戰論を唱へて貰ふことは有利なことです。」

レーニンがニツとして、ブレハノフを見た。

ブルハノフが、少し遠慮がちに言つた。

「その意味では、今度の戰爭は、我等にとつて一つの大きな機會です。恐らく日本は勝つでせう。そして我等大衆は、この機會を摑んですくなくとも、大衆的近代革命の第一歩をふみ出さねばならぬわけです。これは非常に明らかな過程です——われ等の歴史觀から見て……。といふのも、日本が戰つてゐるのも、露西亞のツアーリズムですし、われ等が戰つてゐるのもツアーリズムです。そこに日本とわれ等との一致があるのです。ツアーリヅム崩壞の時が必然にやつて來たのです。」

「ブレハノフさん、片山某は、何といふ挨拶をしたのですか。日本の軍國主義と戰ふと言つたでせうなあ。」

「もちろんです。」

「効果がありましたか。」

「嵐のやうな拍手が起りました。」

「内心からの拍手でせうか。」

「インターナショナルそのものが、さうした空氣の中にあるのですからね。」

「現在は別として、將來において戰爭が絶滅するとお考へですか。」

「考へられません。」

「あなた方が社會主義國家を打ち建てられたとしたら、……」

「資本主義國家と戰ふのです。」

「インターナショナルの精神は？」

「棄てません。」

「戰爭を否定するわけですね。」

「……」

大佐は、ふと、スウエーデンの中佐ヘフチフが、いつか、ストツクホルムのホテルで言つた言葉を思ひ出した。又ポーランド國民黨首領バリスキーの言葉を胸に浮べた。ヘフチフは、ウ

イッテのいんけんな外交を、露西亞の傳統的政策だと言つた。又バリスキーは、露西亞が社會主義國家となつても、露西亞人を信用しないと言つた。大佐は、今、ブレハノフの言葉に、その陰險さ、狡猾さを認めた。そして、この矛盾した戰爭と平和主義を、たくみに使ひわけるのは、露西亞人の右に出づる者はないとまで考へた。

レーニンは、二人の會話を、ほとんど無關心に聞き流してゐた風を裝つてゐたが、ブレハノフが、ずん〳〵大佐に引きづられてゐるのを見て、膝を乘り出した。

「時に、大佐、聯合運動に對するわが黨の態度だが、これは、あなたの方から正式の勸告書を提出して貰ひたいのです。それに對して、こちらからも黨としての態度を、はつきり文書でお答へしたいと思ふのです。」

「承知しました。大會は十月のつもりです。」

大佐はかう答へながら、紙片に何か書いてレーニンに渡した。それには

——貴下の要求の△額は、

と書いてあつた。

レーニンは、その先に

——△△△△と書き足して、ブレハノフに渡した。ブレハノフは、これに目を通してうなづいた。そして、大佐に返した。大佐は、マツチをすつて火をつけた。紙片は、ぱつと燃えあがり、黑い灰となつて卓上に散つた。

「では、書面の回答は早く、會見はパリーに於いて、いづれ知らせます。」

大佐は、煙草に火をつけて立ち上つた。外に出ると、もうくらかつた。大佐は、レーニン等の操縱が次第に成功に近づきつゝあることを確信した。しかし同時に、彼等の中に第二の敵國露西亞を見出した。

——彼等こそ、露西亞帝國の後繼者だ。あの陰險、あの冷靜、あの明智——これこそ最後の勝利者となる條件なのだ。これに對し、社會革命黨の領袖連は、あまりに情熱家であり、正直であり、ロマンチストだ。

大佐は、非戰論を唱へながら、わが國にせまつてくる第二の露西亞帝國をまじかに見るやうな氣がした。

3

在パリーのシリヤクスは、附近の黨員間に奔走してゐたが、かねて、大佐と打ち合せの通り、大佐と會ふために、ハンブルグへ出發することになつた。しかし彼は絶えず自分が露西亞の女探偵につけられてゐることを知つてゐたので、大佐から紹介された、間諜のチャールスに相談した。チャールスは、女探偵をまく色々の案を出したが、どれも完全なものでなかつた。

「困つたね、チャールス、彼奴は、まるで俺の影見たいな奴だ。うまくまいたかと思つて安心してゐると、どこからとなく、ひよつくり現はれてくるんだ。彼奴は、俺さへ握つてゐれば大佐をつきとめることが出來ると考へてゐるらしい……事實さうに違ひないからね。」

シリヤクスが、かう云ふと、チャールスは、ギロリと不穩なまばたきした。

「旦那、どうも術ぢや、彼奴に勝つこはありません……ようがす、今夜お立ち下さい。萬事私がひき受けました。」

「大丈夫かい、チャールス……」

シリヤクスはチャールスの言葉を無氣味に思つた。

「大丈夫です。なに一寸考へることがありますから。」

「後に問題が起らぬやうにしてくれ。」

「ようがす。」

シリヤクスは、チャールスに從ふほかはなかつた。彼は旅の仕度にかゝつた。

チャールスは、ヨーハンを呼び出して何か言ひつけた。

夜、シリヤクスは、ブラリと何喰はぬ顔で家を出た。馬車に乘つて走り出すと、どこからとなく一臺の自轉者が現はれて彼の後を追ふた。女の姿だつた。すると、その後から二臺の自轉車が現はれて、同じやうに馬車の後につゞいた。二人はヨーハンとチャールスだつた。しかし、その後から、もう一臺の自轉車が走つて來るのには、ヨーハンもチャールスも氣がつかぬやうだつた。

シリヤクスの馬車は、次第に市内から郊外へと走つた。合計四臺の自轉車もつゞく……。が一番後の一臺は見えかくれだ。

暗い森影に來かゝつた。

突然馬車が止まつた。

すぐ後の自轉車が、ハツとして横にそれようとした。ヨーハンとチャールは、疾風のやうに突進した。

「待てッ！」

チャールスは追ひすがつて、女の襟がみを摑んだ。ガチヤリ！　アツ！　ドタツ！　女は自轉車からころげ落ちた。チャールスは折り重なる。ヨーハンが、女の手を押へた。

その間に、シリヤクスの馬車は、さつと駈け出した。しかし、最後の自轉車一臺は、それこそ、電光のやうに闇をぬうて、森をかけぬけ、馬車の後を追ふた。

チャールスは慣れてゐた。彼はす早くハンカチで女の口をふさぎ、横だきに女をかゝへて、森の後に走つた。女は諦めたものか、始めから抵抗せず、なすがまゝにまかせた。森の後はセーヌ河の岸だつた。

チャールスは、ドサリと女をなげ出した。女は、靜かに起きあがつた。パサリと顏のハンケ

チが落ちた。星あかりに白い顏が浮いた。女探偵サーシヤだ。ふくよかではないが、ひきしまつた彫刻のやうな顏、目にたゝえる冷たい光……。チャールスは、ぞッとして、ヨーハンを振り返つた。

ヨーハンが前に進み出た。

「奧さん失禮しましたね。」

女の目は嘲笑ふた。

「ヨーハン、お前が、あたしよりも賢かつたわけだよ。今のところではね。」

「ふん、俺が、日本の探偵とは氣がつかなかつたらう。」

「さう思つておいでよ。」

チャールスが、横から喰つてかゝつた。

「おい、サーシヤ、お前は俺を知つてるか」

「さうね萬更知らないわけでもないよ。」

チャールスはうそぶいた。

「弱き者よ、汝の名は女だ！　サーシャ、俺はこの眞理を生かしたまでさ。女をやつつけるなあ、腕に限るよ。」

女は、あざ笑つた。

「野蠻だね……スパイらしくもない……しかし、今度は負けにしとくよ。」

「大きな事を言ふな、ヨーハン、ひつくくつて終ひな。」

チャールスは命じた。

ヨーハンは女をくゝりあげた。

「どうしよう？」

「その木の幹につないでおきや宜い。時は七月、初夏の星月夜だ。ゆつくり川の音でも聞いて露でもなめてゐるが宜い……」

チャールスが、かう吐き出すと、ヨーハンはひものはしを大木の根本にゆはへつけた。

「あばよ……」

二人は闇に去つた。

4

シリヤクスは、汽車で、獨佛の國境を越えハンブルグに走つた。ハンブルグは自由市だ。町の中央を貫くエルベ河は、湖水のやうにゆるやかだ。河口からは七十哩も上流だが、棧橋には、巨大な汽船が浮んでゐる。

定めのホテルに着いたシリヤクスは、ほつとした。露のスパイをふりはなしたことが何よりも輕い氣持ちを與へた。窓からは河ぶちの美くしい並木道が見えた。形のいゝ堀割の橋が見えた。シリヤクスは、窓から流れこんで來る河風をあびながら、口笛を吹きたいほどの爽快さを覺えた。

しかし、彼がかうして一人で悅に入つてゐる時、階下の一室では、彼にとつて容易ならぬ取り引きが始められてゐた。

「さうしますと、どんな御用をつとめればいゝのですか。」

かう言つたのは、ツル〳〵に頭のはげたホテルの主人、これに對して答へるは、いかにも陰

険な目つきをした、脊の高い三十前後の男。

「第一、あの紳士の隣室を貸して貰ひたい。第二、あの紳士に來る書簡、電報は、前もつて、僕に見せて貰ひたい。第三、晝夜にかゝはらず出入を自由にさして貰ひたい。」

「宜しうございます。では例の方は前以て戴いておきませう。」

「承知した。」

脊の高い男は、札たばをつかみ出して、その幾枚かを、主人に渡した。やがて、彼は、シリヤクスの隣室に陣取つて悠々と煙草を吸ひ始めた。シリヤクスは、完全に尾行をまいたつもりで、パリーを立つたが、何ぞはからん、チヤールスとヨーハンが、サーシヤをとつちめてゐる間に、最後に馬車の後を追つた自轉車こそ、ぬけめないサーシヤの、二重の尾行だつたのである。

三日目に、大佐の電報が來た。アムステルダムでレーニン、ブレハノフとの會見を終つた大佐が明日行くといふ通知だつた。この電報は勿論、スパイによつて先づ目を通された。

愈々大佐が來た。二人は一室にとぢこもつて協議した。二人はそれぞれ、今まで自分が奔走

したことの經過を述べ各派の意嚮につき研究した結果、十月一日、第一回聯合相談會をパリー或はスウィスに於て開催することに決定、それ〴〵委員を出席せしめるやう案内狀を出すことにした。

が、この時、問題となつた二つのことがあつた。一つは、社會民主黨に對するシリヤクスの疑ひだつた。シリヤクスは、民主黨の加入を切望してゐたが、内心は彼等に對して可なりの惡感を抱き始めてゐた。

彼は、民主黨領袖の心事に對して、冷血、狡猾、打算、排他の諸點をあげ、彼等がこの機會を利して黨勢擴張に專念するおそれがあることを述べた。

これは、大佐がハツキリと、レーニン、ブレハノフと會見した顚末を述べなかつたからでもあつたが、近頃次第に社會革命黨に近づきつゝあるシリヤクスの、黨的感情から見て當然起る不安であつた。

事實、大佐は、社會革命黨がこの機會を一種の黨勢擴張に利することを認めざるを得なかつた。民主黨は、黨自身においても、千九百三年ベルギーのブラツセルにおける黨第二回大會に

おいて、多數派（ボルシエヴイキ）と少數派（メンシエヴイキ）に別れたほどに、黨精神の確立に全力を注いでゐるのである。彼等ははつきりと、理論的に露西亞（ロシア）帝國崩壞の日が近づきつゝあることを知つてるのだ。そして、社會革命黨が、目前の爭鬪に眼をくらましてゐる間に、彼等は著々と、次ぎの帝國（新社會）への準備を進めてゐる。彼等は自分の黨によつて、次ぎの露西亞（ロシア）を支配しようと目論んでゐるのである。だから、彼等は、少しでも自分の旗色が灰色になるのを恐れる。彼等は、どこへでも、はつきりした自分等の旗を押し立てゝ行く、そして他黨のイデオロギーに對して勇敢な理論鬪爭を挑む。彼等は、その日のために、自分を、はつきりしておかねばならぬと思つてゐる。彼等は決して革命が、自分の黨によつて遂行されるとは信じない。あらゆる黨派に屬してゐる全民衆によつて成就することを知つてゐる。しかし革命後に、民衆の心を握り、新社會を組織するのは、はつきりしたイデオロギーの所持者であることを知つてゐる。彼等は、その日のために、しつかりした黨員をつくることに專念してゐる。

しかし、彼等のイデオロギーは、農民に不向きであつた。マルクスの理論から生れた彼等の理論は、あくまで勞働者向きだつた。が、彼等は勞働者こそ、次ぎ社會の主權者となることを

信じてゐる。信心深い、無智な、そして土地に結びつけられてゐる、露西亞（ロシア）の農民は傳統的に支配される階級であり、支配する位置にないことを知つてゐる。だから、社會革命黨が、農民をもつて革命の主體としてゐるのを內心嘲笑しつゝ、おのれは、着々と、勞働者の中に黨勢を擴張しつゝあるのだ。

大佐は、レーニンと第一回に會見した時、既にレーニンが革命後に抱いてゐる野心を觀破し、彼が表面、他黨と聯合を欲しないことを知つた。そして全然他黨と切り離し、別動隊として活躍することを暗默の中に約束したのである。

だから、社會民主黨に正式な勸告狀を出すのは、只、彼等の主義を、はつきりさせるだけで、全然無駄であることを大佐は知つてゐたので、シリヤクスの疑惑を當然だと肯定したが、これはレーニンが出した一つの條件である。大佐は、シリヤクスにすまぬと思ひながらも、彼をなだめ、招待狀を發送させることにした。

第二の問題は、大佐が出したもので、自由黨に、果して招待狀を出していゝか、どうかといふことであつた。自由黨といふのは、所謂知識階級の不平分子で、その內部には、最過激の者

もゐるし、穏けんなものもあつて、硬軟の懸隔が甚だしかつたのである。かうした自由黨に招待狀を出すのは、かへつて聯合の障碍となることをおそれ、招待狀の發送に反對したのだつた。しかし、シリヤクスは、自説をとつて動かず、遂に大佐も同意して招待狀を出すことに決定した。

が、それにしても大佐はまだ、ポーランド社會黨の領袖に會はず、その意向がはつきりしなかつたので、シリヤクスは、ロンドンより、首領ヨードコーを呼び寄せることにして、招電を發した。

5

數日後の深更のことだつた。

大佐がベツトに横はつてまどろみかけてゐると、

(コツコツ……コツコツ……)

しのびやかに、大佐の室の戸をたゝくものがあつた。

「はて、シリヤクスか知らん……しかし、シリヤクスだつたら、何も今頃やつてくる理由はない筈だ。おかしい！」

大佐は、寢まきのまゝ起きあがつてドアーをあけた。一人の紳士が立つてゐる。彼は手をロにあてゝ、大佐の聲を制し、足音を忍んで、中には入つた。大佐は、靜かに後をしめる。

「突然、御免下さい。僕はヨードコーです。」

「えッ！　ヨードコーさん。」

「わけを話さねばわかりません。實は、僕は今朝着いたのです。ところが、このホテルには入つた時、いやな奴の顔を見たのです。露の探偵です。私が前につけられたことのある奴で、たしかスプリンゲルといふ名の男です。僕は、先方が氣づかぬのを幸、一旦ひきかへし、彼奴のすきを見て、一旅人として投宿、折を待つてゐたのです。ところが驚くぢやありませんか、彼奴は、この室の隣りにゐるのですよ。」

聲をしのんでのこの話、さすがに大佐は驚いた。大佐は、すぐシリヤクスを呼んで來た。シリヤクスの室は三階のはしで、ヨードコーは、はつきりその室を知らなかつたので、直接大佐

の室を訪ねたのであつた。

大佐はとりあえず、聯合運動に對する彼の意嚮をきいた。彼は一も二もなく賛成した。そして、大佐から國民黨の參加を告げられた時、

「よくも、あの頑固黨が承知しましたね。」

と言つた。

翌日、大佐はストツクホルムへ、シリヤクス、ヨードコーはロンドンへ、はなればなれになつて出發した。三人は、うまく探偵をまいたつもりだつたが、果してどうだつたか。

それにしても、探偵は、もう大佐の運動の輪廓を知つたと思はねばならぬ。間諜戰も次第に風雲の急なるを思はせる……。

九、犧牲

1

露西亞の秘密探偵の目をのがれて、ハンブルグを脱出した大佐は、先づデンマークのコペンハーゲン市に現はれた。同市の税關長、ベレンセンは、前から大佐に厚意を示し、諜報について助力してゐたので、大佐は、ヴエストルブールバルに彼を訪ねて、一週間ほど滯在、諸事を打ち合せ、ストツクホルムに向つた。八月の末つ方であつた。

然るに、ストツクホルムに着いて見ると、守都宮大佐からの電報が、公使館に待つてゐた。

――コラレルナラキタレ

大佐は、代理として諜報を受け持つてゐる平野中佐、書信の中間取り次ぎを依頼してゐるリンドベルグ、間諜のリエスと會つたゞけで、直ちにロンドンに向けて出發した。

リエスが見えかくれに大佐を護衛して、棧橋まで見おくつた。汽船に乘り移らうとする時、リエスは近づいて言つた。

「先生、大丈夫尾行はついてゐないやうです」

「御苦勞だつたね、リエス。」

「しかし、萬一の場合は、この船の水夫にモンスといふ奴がゐます。これに賴んでおきましたから、彼奴と相談して下さい。氣は荒いが、實直な男です。」

「有難う！」

大佐は乘船した。やがて、汽船は碇を卷き、汽罐は足ぶみを始めた。大佐は、デッキに立つて愛すべき男——ヨーハンに目で別れを告げた。

船は港をはなれ、バルチック海に乘り出した。リエスが話したモンスにもそれとなく會つたが、別に彼の援助を求むることもなく、コペンハーゲンに到着、それより汽車でカレーへ、そ

れから、ドーバー海峽を渡つて、ロンドンに入つた。

早速宇都宮大佐のかくれ家を訪ねると、大佐はシリヤクスの他、ポーランド社會黨主領のヨードコー及び、その數名の黨員と會合して、しきりに議論を戰はしてゐるところだつた。

大佐が座につくと、さすがに、みんな口をつぐんだ。大佐は、目さとく、この場の空氣に不穩なものがあるのに氣がついた。

「ヨードコーさん、何かおこつたのですか。」

ヨードコーは、當惑さうにシリヤクスを見た。シリヤクスは、宇都宮大佐に目をなげかけた。宇都宮大佐が口を切つた。

「明石君、妙な話になつたんだ。實は、ヨードコーさんのところに、黨員の方が來られての話だが、君とシリヤクスさんの關係について、いろんな風評が、ブンド黨あたりから出てゐるらしい。」

「ほう、どんな風評でせう？」

「シリヤクスさんが、私腹を肥やすために、君の手先きになつて、この聯合運動をやつてゐる

といふのが一つ、も一つは、露西亞の大衆は、日本の大衆とこそ手を握つて非戰論をふりかざすべきで、日本の軍閥の手先きとなることは、革命運動の主旨に反するといふのだ。」

大佐は、目を見開いたまゝ考へた。始め、チラと、レーニン一派の策動かと思つた。しかし、それにしては拙劣だ。かつてレーニンが言つたやうに、彼等は、この日本の好意を受けるにちがひない。彼等は決して聯合運動の障害になるやうなことを前もつて策する筈がない。彼等の策動はその後にある筈だ。

次ぎに浮んだのは、露國政府の逆宣傳だ。

（うむ、これにちがひない）

大佐は、ハムブルグのことを考へた。いやその前の事情を考へて見ても、自分が、シリヤクスと會つてゐることを知つてゐる筈だ。

（さうだ、スパイの逆宣傳だ。）

大佐は、強くうなづいた。そして、非常に鋭い目をしてヨードコーの後に並んでゐるポーランド社會黨員等に臨んだ。

「だから、君達は、どうしたといふのだ！」

「……」

彼等は射すくめられるやうに、固くなつた。

「君等は、この見えすいた政府の逆宣傳を信じたのか！」

一座は靜まり返つてゐる。黨員の顏には次第に當惑の色がみなぎつてくる。

「どうだ？」

「全部信じたわけではありません……」

一人が、やつと口を開いた。

「では、どうしたのだ？」

「こんな風では、聯合運動の効果が疑はしい。だから、我が黨にしても會議に出席は見合したがいゝと考へたのです。」

「よろしい。君達が、萬一にも、シリヤクス氏を疑ひ、又この聯合運動が不合理のものと考へるなら、敢て君達の共力を望まない。僕達は、只、僕達の誠意を感じ、共同の利害を認める他

の各黨と事を共にするばかりだ。」

大佐は、黨員に、かうはつきりと冷たんに言ひ渡してから、ヨードコーに、氣の毒さうな目を向けた。

「ヨードコーさん、どうぞ御自由に……」

ヨードコー答へず、誰も口を開かず、一座は白けきつた。その中を、大佐は、これだけ言ひのこして、さつさと出て行つた。そして、とつておいたウールウイツチの小ホテルに歸つてしまつた。

2

やがて、宇都宮大佐が訪ねて來たが、二人の話はこれにふれず、滿洲における日露兩軍の戰爭について、血の湧くやうな談論に夜を更かした。當時、わが第三軍は旅順に向つて、肉彈戰をつゞけてをり、第一、第二軍は、遼陽において、露の大軍と決死の猛鬪を開いてゐたのであつた。二人はもとより旅順の陷落も、遼陽の戰勝も信じたのであつたが、諜報によつて知る露

國內軍隊輸送の實蹟が、開戰當時の豫算以上に能率をあげつゝあることに、大きな不安を感じた。シベリヤ直通の軍事列車の運轉數は、一日二回より三回、三回より四回へ、五回へと次第に增加され、バイカル湖の鐵道は完成した。當時シベリヤ鐵道は單線だつたので、わが軍では、列車は往復するものとして計算したのであつたが、露軍はこの裏をかき、列車は只シベリヤに向つて走るだけで、後にもどすことをせず、不用の貨車は全部燒き棄てつゝあつたのである。わが軍にとつては大きな誤算が襲ひつゝあつたのだ。

「上野がひきゐた鐵道破壞隊はどうしたゞらう？」

二人は期せずして、彼等のことを話しあつた。彼等の消息はまだ諜報に入らないのだ。

數日後、ヨードコーが訪ねて來た。彼はいきなり大佐の手を握つた。

「大佐、お許し下さい。黨員の誤解は完全にとけました。」

「では、聯合運動に御參加下さるでせうか。」

大佐はまだ冷たんだつた。

「勿論です、大佐。先づそのいきさつを述べませう。私はそれからすぐ、あの噂の出所につい

て嚴重に調査したのです。ところがどうでせう。在ロンドンのブンド黨員の陰で、糸を引いてゐたのは、ルベエといふ奴で、その男の正體はマノニロフといふ、政府のスパイだつたではありませんか。」

「うむ、マノニロフ……大概その邊の仕事でせう。しかしヨードコーさん。」

大佐ははじめて笑つて言つた。

「小人養い難しといふ東洋の哲學者の言葉がありますが、あんな黨員がゐては、あなたも色々骨が折れるでせう。」

「全くです。大佐。何かことがあれば、發言權を獲ようと、ああして、反抗してくるのです。」

「ね、ヨードコーさん、あんな黨員は、突つぱなしてやることですよ。」

「あなたの明察には感じ入りました。」

「しかし、ヨードコーさん、政府の方でも、これから、色々策動するでせう。お互に肚を据ゑてかゝることが肝要ですね。」

「ハムブルグでは、うまく尾行をまいたつもりでしたが、どうも油斷がならなくなりました

ね。」

「腕利きの女探偵が現はれたんです。それ以來、どうも、彼等のやり方が巧妙に、陰性を帶びて來ましたよ。」

そこへ、シリヤクスが來た。三人は改めて將來の結束を誓つた。

3

或る夜、宇都宮大佐からの電話——

「上野が歸つて來た。今直ぐ君のホテルに行く！」

さすがに、大佐は胸をおどらせて待つた。宇都宮大佐、田中中佐と共に、上野がは入つて來た。見ちがへるやうに變つた姿——日にやけた顏、げつそりと落ちた肉……。落ち窪んだ眼底にたゝえた悲痛な哀訴！

大佐は、事情を察した。二人はつか〳〵と歩み寄つた。顏を見合せた。ポロリと上野の目から涙がおちた。大佐は、上野の手をとつて强く握つた。

「上野君、御苦勞だつた！」

「報…報告します……」

さすがに上野！　彼は、こみあげてくる感情を制した。

上野の話——

上野を班長とした鐵道爆破隊七人の一行は六月の下旬、ルーマニヤより露の國境を突破して、キエフに潛入、それより貨車にひそんでモスコーの少し前にあるカルガに下車、それより、晝は森林に野營を張り、夜道をえらんで、目的地カザン市近くの小村に着いたのは、實に、八月の初めであつた。その間の困難は言語を絕し、一行中の日本人一人、外人二人は、猛烈なコレラにかゝつて斃れたのであつた。又或る時は警吏に訊問され、やうやく捕縛をまぬかれたこともあり、遂に見破られて、山中に追ひこまれ、一百姓の情けで、やつと虎口を脫したこともあつた。

その小村は、カザン市まで六哩で、鐵道に沿ふてゐた。村の東側を小さな川が流れて鐵道を横斷し、一町足たゞの鐵橋がかけてあつた。上野は、この鐵橋を爆破する決心をした。

一行は生き殘つた四人、日本人は上野と淺田、外人はルーマニヤ人のミドレーと英人のマーク。だ。着いのは朝だつた。二外人が、何氣ない風をして、村の雜貨店に食料を買ひに行き、上野と淺田は近くの森に陣取つて準備にかゝつた。

夜が來た。更けて行つた。

四人は森を這ひ出して、鐵橋に近寄つた。幸、近くに人影がない。かねての訓練通り、四人は、橋脚にもぐりこんで作業にかゝつた。大陸の夜は無限の靜寂をこめてゐる。わずかの物音でも非常に物々しく神經をうつ。四人は幾たびかぎもを冷やしながらも、遂に裝塡を終つた。

「いゝか！」

力强いさゝやき、上野はみち火に點火した。轟然たる音響は、森をふるはせ、怪火は闇にさけた。橋脚はくだかれ、線路はふきとばされた。

四人は、逃げた。ひた走りに斷けた。音響に驚いて目をさました村をよけ、畑をつつきり、森をぬけ、そして次ぎの森へ……次ぎの森へと……。

どの位斷けつゞけたのだらう、ある無人の曠野に達した時、地平線が、ポツと明るくなつた。

「おい休もう！」

上野が聲をかけた。

「うむ……」

うめくやうに應へた三人は、その場にぱたりとあうむけに倒れた。そして、口をあけて大きく呼吸した。

「水を持つてゐるか……」

ミドレーがあえいだ。

「もうない。」

三人が同時に答へた。

沈默、荒い呼吸だけ。そしてやがて、四人とも昏々たる眠りに落ちた。

やきつけるやうなかはきに、ふと上野は目をさました。ギラ〳〵と光る眞夏の太陽が、ヂリ

ヂリと曠野を照りつけてゐる。燃えるやうな草いきれ、そのる壺の中にゐる四人……。全身に油のやうな汗がたぎつてゐる。

「おい、起きろ！」

上野は三人を搖り起した。

三人は、はつと起き上つて、まぶしさうにあたりを見まはした。

「おう、みんな無事だつたなあ！」

四人は、今更のやうに無事を祝しあつたが、襲ひかゝつたのは、餓えと渴きだ。水がないことはもう明瞭だ。彼等は、めい〳〵に食料を探した。が、逃げてくる途中、おとして終つたものか、用意した食料の包みがない。

「仕方がないが、先づ水だ。水を探さう……」

誰かが、かう言ふと、四人は元氣よく歩き出した。見わたすかぎりの曠野！　彼等は一寸した凹地があれば走り寄つた。が無駄だ。

二時間も、かうして歩いた。ふと見ると、前方に低い丘陵があつて、一本のポプラの木が立

つてゐる。その横に、二三の屋根がわづかばかり頭を出してゐる。
村があれば水がある。食料がある！……
彼等は驚喜して走り出さうとした。
と、上野が、厳然と叫んだ。
「待て！　どんな網が張つてあるかも知れぬ。淺田君、君一つ偵察して來てくれ給へ！」
がつかりして二外人はうづくまる。淺田は最初駈け足、次ぎに斥候の姿勢をとつて村へ近づいて行く……姿を消した。
やがて歸つて來た。三人が彼を圍む。
「どうだつた？」
淺田は手を振つた。
「駄目だ！　非常警戒だ！　巡査がゐる、兵卒の影も見た！」
「うむ……」
「しかし、水だけはある。村の手前に小川がある。」

それだけでも光明だつた。三人は淺田の後について小川へ走つた。
元氣づいた四人は、その村をよけて、又歩みつゞけた。
「とに角、線路から遠くはなれることだ。この次ぎの村に行けば、畑位は荒せるだらう。畑には、何か食べ物があるよ。」
上野は、はげました。

4

夕方、ステツプを通りすぎて次ぎの村近くに來た。そこも警戒されてゐたが、畑から、きうりや西瓜を徴發して、うえを防いだ。その夜は、村近くの森に寢た。夜明け前から又歩き出した。途中で、畑の物を食べた。村を二つ過ぎて夜になつた。森に、もぐりこんだ。翌日も同じやうな難行をつゞけた。夜は森にひそんだ。
森からは、村の灯がチラ〳〵と見えた。四人は、餓えと疲勞に、ぐつたりと横になつてゐた。
上野は、うと〳〵とまどろんでゐたが、ふと物音に目をさました。ミドレーとマークの二人が、

足音を忍んで、立ち去つて行く姿があつた。

「待て！　どこに行く？」

上野は、するどく呼びとめた。

二人は、はッとして立ちすくんだが、マークが、かすれた聲でどもり乍ら言つた。

「う……上野さん！　ぼ、僕達は、もう辛棒がしきれません……が、な、何も、裏切るわけではないのです……」

「どこに行くのだ？」

「む……村へ、しよ、食料を盜みに……」

「馬、馬鹿な！　もう大分警戒が薄くなつてゐるところだ。明日にでもなつて、この次ぎの村へ行けば、大手をふつて食料を買ふことが出來るだらう。辛棒したまへ！」

「で……でも、もう辛棒が……」

「萬一、捕まつたらどうするか。」

「か、構ひません……僕達は、アフリカの蠻地で幾たびとなく、土人に捕へられました。ぼ、僕達は危險を恐れません。」

「止せ！　場合が違ふ、勇氣をふみちがへるな！」

上野は、きつと身構へして怒なりつけた。

二人は、大きくため息をついたが、これ以上爭はず、元の所にかへつて横になつた。しかし、夜明け前になつて、上野が目をさました時は、もう、二人の姿はなかつた。

と、同時に、にはかに村の方が騷がしくなつた。上野と淺田は、息をのんで、二人を待つたが、二人は捕へられたか、いつまでも歸つて來なかつた。

「なあ、淺田……」

上野は歩きながら今は一人になつた僚友に話しかけた。

「ミドレーもマークも、勇敢な奴だつた。死を恐れない點では、決して我等日本人に優るとも劣つてゐない。しかし、只忍耐力に缺けてゐたよ。」

淺田が答へる。

「さうだなあ、彼奴等本能的だつたよ。勇敢さも本能的だ、冒險を好むのも本能だ。そして本

能的に村の中に飛びこんで行つてしまつた。」

「僕は、たび〳〵日本の教育が不自然だといふ非難を聞いてゐたがなるほど日本の教育は一面本能を制へて殺すやうな教育だ。しかし、かうした場合には、その教育が生きてくる。うち鍛へた勇氣でなくては駄目だなあ……」

上野は、かう言つて、淺田の手を握つた。

「淺田君、辛棒しようねえ。」

その翌日着いた村は、もう警戒もなければ鐵橋爆破の事實も知らぬやうだつた。二人はやつと、人間の食ふ食事にありつき、人情深い百姓の家に休息した。が、いよ〳〵出發といふ時になつて、淺田が動けなくなつて終つた。その夜は非常な發熱で、うは言まで口走り始めたのだ。上野は懸命に看病した。宿の百姓も、よく面倒を見てくれた。醫者も呼んだ。しかし五日目に、淺田は眠るやうに息絶えた。

もとより、上野は一箇所の爆破に滿足したのではなかつたが、只一人になつてしまつた現在は、もう一切を諦めねばならなかつた。彼は、僚友の亡骸を異境に葬るや、悲痛な心を抱い

て、かうして英國に歸つて來たのである。一人になつてからの苦勞については、彼は多くを語らないのだ。

大佐は、うちしをれた上野を慰めた。宇都宮大佐も田中中佐も、彼の勞を謝し、彼の勇氣と忍耐をほめそやした。

しかし、大佐は、鐵橋の爆破の効果については充分にその價値を認めたが、それにともなう、勞苦と犧牲が餘り大なるに鑑み、この計畫は、これによつて中止することにした。不平黨操縦は、これを補ふに充分だらう。

5

各黨からの正式回答は、未だに出揃はない。しかし、小さな會合は、絶えず大佐のかくれ家で開かれてゐる。又時には各地に派遣してゐる間諜もやつてくる。

ある夜、深更、チャイコフスキーやヨードコーなどが大佐のかくれ家に集つてゐた。と、急に門前が騒がしくなつた。見に行つた黨員の一人が、眞青な顔をして歸つて來て、沈痛に叫ん

だ。

「やられました。見張りに立つてゐて貰つた××君が殺られたんです！」

さすがに、動じない人々であつたが、思はず立ち上つて、駈けおりようとした。

と、チヤイコフスキーが押しとゞめた。

「靜かに皆さん！」

ホテルのボーイが、一通の手紙を持つて現はれたからだ。近くにゐたシリヤクスが、その手紙を受けとつて、大佐に渡した。差出し人の名が書いてない。大佐は封を切つた。中には白紙に只一行、

——警告す！　すみやかに日本へ去れ！

大佐は、さまで驚いた風もなく、この手紙を、示したが、見た人々は、ひどく緊張した。

矢張り、チヤイコフスキイーが口を開いた。

「スパイの手だ……××君は、重要書類は持つてゐなかつた筈だな。」

さつきの黨員が答へる。

「持つてゐなかつた筈です。」

「××君にはすまないが、かゝりあひになつては都合が悪い、みんな口をつぐんでゐて欲しい。それから諸君！」

彼は一座を見まはした。

「現在、一番重要な地位にあるのは大佐だ。しかし、危險は大佐にせまりつゝあると思はねばならぬ。何とか、このホテルを脫出する方法をとつて貰ひたい。」

みんなが、大佐に注視する。

大佐は重々しく答へる。

「まさか、スパイも私に危害を與へようとは考へてゐないと思ひます。彼等の職能から考へても、彼等が求めてゐるのは私達の計畫の內容です。しかるに、その內容が、彼等にわからない。この手紙も、それから××君への危害も思ひきつた一つの探りに過ぎないと思ひます。彼等は、この混亂と驚愕に乘じたいのです。先日問題になつた僞ブンド黨員の逆宣傳も、はつきりした我等の計畫を知つた上でなく、一つの試しに過ぎなかつたと信じます。しかし勿論、私

はこのホテルから身をかくしませう。」

人々は、大佐の觀察に同意した。

老練な露西亞の探偵が內容を知らなくて、大佐に危害を與へるやうなヘマをやる筈がない。而も、その內容を知る筈がない。しかし、この際この明らかな觀察を持ち得る大佐の沈着さには、內心尊敬をおしまなかつたのである。

翌日、大佐は嚴秘裡に居を變へ、それ〴〵關係方面に打電した。

又、新聞には、身元不明の露西亞人の他殺死體が路上に發見されたと片すみに掲載されてあつた。

一〇、血をはらむ巴里會議

1

各派革命團體の回答が漸やく出揃つた。他は全部、無條件で參加を回答したが、豫想の如く、自由黨は會議參加について硬軟二派に別れ、硬派は參加を通知したが、會議地は必ずパリーにするといふ條件を附した。

又社會民主黨は、ブレハノフの名義で二つの理由を附して、參加を拒絕した。

一、わが黨の重なる者は追放令のためパリーに入るを得ざるため出席不能。

二、わが黨は、社會黨の原則を守るが故に、社會黨の原理に基かざる會合には臨むを得ず。

即ち、一、は自由黨に對するもので、自由黨はパリーに多く棲み、民主黨員は、スウィスを本據としてゐたので、黨員の多寡と、便否がその勢力に關係するところからの主張であつた。

二、は、社會革命黨に對して、己れの立場を明瞭にしたものであつた。社會革命黨は、(一)國政を監督する常開の議院を設くること、(二)國家の吏員を公選にすること、(三)經濟及び行政上の單位たる村制の完全なる自治を期すること、(四)集會、演說、出版、選擧の自由を期し、全國民に投票權を與ふること、(五)常備軍を廢し、地方民兵制を採ること、(六)土地を國有に移すこと、等のテーゼをもつて立つてゐるのであるが、これによつても分る如く、地方自治——即ち農村に重きを置いたのである。彼等は、農民の中にこそ、眞に、新社會の萠芽がある。農民こそ生れながらの社會主義者だ。彼等が傳統的に行つてゐる共力、相互扶助こそ、これを押し進め、合理化するところに、はじめて萬民が求むる新社會が現出する——と信じたのである。只、その手段に至つては、言論術策を斥け暴力を以て第一要義となした。

これに對して社會民主黨は、所謂マルキシズムに立脚し、社會革命黨が農民を重視するのを、認識不足となし、近代資本主義勃興の結果生れ出た勞働階級こそ、唯一の革命層で、社會

革命黨が、農民の傳統精神の中に次ぎの社會の萠芽を見るとなし、勞働階級の自覺と、その戰鬪精神こそ、次ぎの社會を打ち建てるエネルギーであると主張した。

しかし、社會革命黨は、敢て民主黨との共同戰線を否まなかつたが、民主黨は、果然、反對を表明したのだ。同時に又、その別派たるブンド黨も不參を通知した。

内心參加を期待してゐたシリヤクスは、顏色を變へて失望したが、大佐は、シリヤクスを慰めて言つた。

「シリヤクスさん、民主黨は今のところ、そつとして置かうではありませんか。彼等を會議に參加せしむることは、かへつて混亂のもとです。各黨が運動をはじむれば、必ず、彼等も追從するにきまつてゐますよ。」

シリヤクスも納得した。

2

サチヨー侯爵と言へば、實はパリー中で一人もこの人を知つてゐるものはなかつた。サチヨ

ー侯爵は、九月の末、パリーに現はれ、アンタン町に堂々たる邸宅を借り入れて棲んだ。近所では、伊太利の金持の侯爵様だと噂したが、誰一人として侯爵の顔を見たものはなかつた。ところが十月の中頃には、もう、どこかに引越してしまつたので、近所では狐につまゝれたやうに思つた。

その侯爵邸――

十月一日の午前九時のことだ。

一臺の馬車が門前にとまる。二人の門番が鋭い目をなげる。馬車から下り立つたのはフロックに山高をいたゞいた相當年輩の立派な紳士、彼は、悠々と門内に歩みよる。そこは玄關、いかにも貴族の執事らしい、金ピカの服をつけた堂々たる體軀の男が、丁寧に頭をさげる。

「公爵ドルゴルスキー」

紳士がかう言ふと、執事はそのまゝ奥へ、主人の居間と思はれる豪奢な一室の前に來て頭を下げる。

「申し上げます。公爵ドルゴルスキー様でございます。」

「客間にお通し申せ。」

中から落ちついた靜かな聲。

去る。再び玄關。

「どうぞ……」

紳士はうなづいて、執事に從ふ。やがて客間。調度、裝飾、しつとりと落ちついてゐる。

再び門前、又一臺の馬車が現はれる。同じやうなことがくり返される。かうして一時間ばかりの間に、三十幾名の來客が、侯爵家の門内に消えた。

執事が門番の所に現はれた。小聲で、

「おい、ヨーハン、もう全部すんだ。門を閉めてくれ。」

金ボタンの服をつけた八字ヒゲの門番と、も一人の赤ゲの門番が、一寸外をのぞいて鐵の門をとざす。

やつぱり、小さな聲――

「リエス、お前の執事ぶりは、とてもよく似合つてるよ。」

「さうさ、おれには、それだけの格がある。お前は門番にうつてつけだ。なあチャールスさん。」
「馬鹿言へ、さう言へば、俺まで門番の格になる。只、俺の變裝術がうまいから、よく化けられたゞけだ。お前は、その大きな圖體が役に立つたにすぎないんだ……」
「しッ！」
ヨーハンが注意する。
門前に人が通りかゝる。意味あり氣にのぞいて行く……
「警戒の壯士だ。」
チャールスがつぶやく……。
リエスの執事去る。
あとは、ヨーハンとチャールスの二人變裝のヒゲをひねりながら、鋭い目を門外に配りつゝ話す。
「こん度といふ今度こそ、サーシャの目をまいたと思ふね。」
「さうだ。この前にしくじつたからね。しかし萬一、彼奴がつけてゐたら、今度こそ、ばらして終ふんだ。旦那の話ぢや、ロンドンで彼奴ア、一人やつつけたといふことだ。」

「うむ！」
二人の目は殺氣立つ……。

3

侯爵家の大廣間、三十幾名の名士が程よくテーブルについて會議の形をとつてゐる。千九百〇四年十月一日、露西亞革命運動に劃期的衝動を與へた、諸派連合會議は、中に民衆のうめき、血の叫びを包み、異常な緊張をもつて開會された。出席者は、社會民衆黨、ブンド黨を除いた十三派の委員、顔振れは、既に大佐及びシリヤクスが一度あつたことがある、諸君もすでに大部分承知の各領袖、只自由黨からは、意外にも、公爵ドルゴルスキー、博士ミルコフ、ストルーヴェ等黨内一流の人物が出席した。ドルゴルスキーは、露國隨一の名家で、前皇帝ルーリツク王朝の苗裔であるルーリツク家は、露國内から、蒙古の勢力を驅逐した、イヴアン四世を有し、露國の今日をあらしめた名家であるが、千五百八十四年、イヴアン四世が殁した後、

内閣相つぎ、遂に斷絶し、ロマノフ王朝にとつて代はられたのであつた。

博士ミルコフは、有名なる大學者で、後帝政が覆つてケレンスキー内閣が組織されるや、入つて閣僚の椅子に就いた有力者、ストルーヴェは、自由黨隨一の辯論家で、常にレーニン等と論爭をつゞけたので有名である。

さて、先づ議長の選擧、議長は原案者たるの故をもつて、シリヤクスがえらばれた。しからば大佐は――大佐は隣室に陣取つてゐる。會議は、露國内に關すること、大佐が姿を見せることは、無意味且つ、不合理である。大佐は、嚴然と腰をおろし、隣室に耳を傾けてゐる。横に上野がペンを持ち、用紙に向つてゐる。

會場では、議長にえらばれたシリヤクスが立つて、今日までの經過を述べる。例のキビ〳〵した力强い口調……。しかし、彼は一言も、日本及び大佐にふれない。このことは既に、出席者全部が暗默の中に了解してゐること、言ふて益なき事である。

つゞいて、彼は、各派連合の急務を力說し各員の贊成を求めて席に着く。二三の質問が起る――民主黨及びブンド黨不參加の理由だ。

シリヤクが再び立つて、民主黨の回答文を讀みあげる。

一座騷然となる。民主黨に對する非難、不滿、嘲罵の聲だ。

シリヤクスが、激勵の口調でつゞける。

「諸君！　社會民主黨及ブンド黨が、この會議に參加を拒絶したことは、本員も大いに遺憾とするところでありますが、われ等の運動は一意、民衆の自由と幸福のために企てられたものである以上、彼等の不參加によつて會議の成立に、一分の微動だに與へられることなきを確信いたします。思ふに、この運動の主體となるはわれ等代表にも非ず、又社會民主黨にも非ず、露國内の大衆その者であります。大衆の動くところ、そこに黨派の差別はありません、民衆黨がいかに自重を期するも、遂には大衆の動きにひきづられ實質において、我等の運動に追從するものと觀察いたします。」

「さうだ。彼奴等をひきづれ！」

「彼奴等の鼻をあかせ！」

こんな叫びが二三の者から起つた。

社會革命黨、パリー常設委員のルバノウイッチは憤然と立ち上つて叫んだ。

「社會民主黨は、常に勞働階級をもつて、革命の主體なりと主張してゐる。この場合、若し、彼等が、この運動に勞働者を參加せしめなかつた場合は、宜しく民衆の中に、自由の裏切者として銘記せしむべきだ！」

贊成の拍手が起つた。

大佐は、靜かに快心の笑みを、浮べて聞き入つてゐる。上野が運ぶペンの音……こゝは又何といふ靜かさだ。

4

この騷ぎがをさまると、今度は各派の代表が立つて、贊成演說をやる。大體において同じやうに、シリヤクスの意見を强調して最後に、シリヤクスの勞に感謝の辭をさゝげる。

かくて、午餐に入り、各個に圓卓を圍んで懇談を重ねる。料理人給仕、すべて、各黨の若者。大佐はまだ姿を見せぬ。

午後、いよ〳〵本題に入る。聯合の結果各黨がとる運動方法だ。ところが、これには異論が簇出した。

社會革命黨は、チヤイコフスキーの秘書役たるソースキーが立つて、言論文書宣傳の迂愚を論難し、黨員のロシヤ潛入、大官、貴族の××を主張する。これに對しては、アルメニヤ、ゲオルギー、白露、小露黨は贊成したが、ポーランド黨は、國民的示威運動の効果を主張し、自由黨は暴力を排し、言論の力を强調した。猶、同一地方においても社會黨と憲法黨、國民黨の中に、手段の緩急についての意見が分れた。そして、各々、その理論、効果について論爭し、いつ果てるとも知れなかつた。實際において、この手段方法たるや、各黨の主義方針とデリケートな關係を有するもので、これが決定は非常に重大さを持つてゐたのである。

しかも、議論が白熱して來ると、次第に感情が加はつて來た。さすがのシリヤクスもその收拾に困難を感じて、そつと隣室に去つた。

「大佐お聞きの通り困つたことになりました。」

大佐は沈着に答へる。

「無理もないことです。しかし私の考へるところでは、この際運動方法まで劃一的に統一することは困難、かつ効果が薄いと思ひます。會議の空氣からして、諸君は劃一的な手段の一致を思ひこまれたことゝ思ふが、いかゞでせう次の通りにしたら……。」

大佐が案を述べる。

シリヤクスは膝をたゝいて同意、會場に戻つた。そして、代表の謹聽を求め、運動の手段は、各黨の事情にもとづき、得意の方法を用ひることを提案した。

これは、わかりきつた當然の歸結だつたので異議なく多數をもつて通過、自由黨は州郡會を煽動し、所謂言論をもつて政府を攻擊し、革命黨その他は、おうむね非常手段をとることに一決した。が只一黨、フインランド憲法黨のみは、議長シリヤクスをその領袖の一人とするにかゝはらず、この決議に服從しなかつた。卽ち、舊元老議官、メツケリンの一派は主張する、

「われ等は、何よりも先づ五萬挺の小銃を必要とする。これを得るまでは只陰忍あるのみ、徒らの蠢動は只、露政府の神經をとがらすのみである。」

これは一理ある主張であつたが、大勢は旣に決した。シリヤクスは責をおふて、憲法黨を脫し、卽座に新黨フインランド急激反抗黨を組織する旨を宣言した。

しかし、メツケリンの主張は隣室の大佐に、大きな暗示を與へた。それは、「小銃」の一語であつた。

會議はほゞ豫想通り、成功をおさめて終る、つゞいて自由黨、フインランド憲法黨を除いた第二次會議が開かれたのは、もうその夜もよほど更けてゐた。その二次會は非常手段を用ふる黨のみの打ち合せ會であつたが、特に、

（露國各地における動員の妨害）

の一項を決議したのは、あきらかに、大佐に對する好意の表明であつた。

かくて、遂に、露西亞第一革命の因をなした、第一回聯合會議は終つた。大佐は始めて廣間に現はれた。そして、今度は大佐を圍んでの密議――それは資金供給の協議だ。これも終つた。人々は、一々、大佐と强い握手をかはして退出して行く。彼等は、明日にも亡命地を去り、本國に潛入するだらう。パリーも秋だ。ロシヤも秋だ。滿洲も秋だ。滿洲においては、沙河をはさんで兩軍續々と兵力を集中し、秋風は、戰氣をはらんで悲壯！　歐露の秋氣も亦、國

民の怨嗟をこめて、はだにせまる。只一人パリーに策を練る大佐の明智は、ます〳〵さへて秋霜烈日の光を増す。

さて、領袖等、みな去つて後に、深更の客。はげ上つた額、巨大な頭、慧々たる眼光の持主――それは社會民主黨の主領レーニン。只二人、密室に相對す。

「いかゞでした。」

「豫想通り、ほゞ成功……」

「自由黨は？」

「勿論贊成。」

「その運動方法は……」

「州、郡會の煽動、主として言論をもつて……」

レーニンの顏には、かすかながら嘲笑の色が浮ぶ。大佐は見逃さず言ふ。

「レーニン君、あなたは、自由黨を蔑視しておられるやうだね。」

「彼等が或る時代につとめてくれた役割に對しては感謝してゐます。しかし今日では……悲し

いかな、彼等には階級的立場がない。」

「しからば社會革命黨は？」

「一言にして言へば認識不足です。」

「農民はそんなに無力でせうか。」

「近代的色彩がない。露西亞帝國の壞滅は、又同時に、露西亞の資本主義帝國の崩壞です。而して資本主義の崩壞は、その內部から、卽ち、工場勞働者によつて導かれるのです。」

「革命が成就した曉、農民はどうなります。」

「勞働者と同じ立場に組織しなければなりません。」

「出來るでせうか。」

「出來ます！」

レーニンは確信ありげに答へた。

大佐は重ねてたづねた。

「レーニン君、若し、あなた方の黨が露國を治めることになり、あなたが主權者になつた時、

あなたは、萬民に對して一視同仁の高い氣持ちを持ち得ると信じますか。」

「さあ、それは一體どんな意味でせうか。」

「たとへば、あなたの政治に反對する社會革命黨に對していかな處置をとりますか。」

「……」

さすがなレーニンも一寸ためらつた。

大佐がつつこんだ。

「私は、現在のあなた方の態度から推察して斷然、第二者の存在を許されないやうに思ひますね。」

「お言葉通り許さぬでせう。」

「すると、あなたがつくつた國家には、眞の自由はないと思ひますね。」

「理想を實現するためには、それも仕方がありません。」

「ああ、レーニン君……」

大佐は、半嘆息するやうにつゞけた。

「あなたのその考へは、いかにも露西亞的ですよ。極度の專制になれたロシヤの民族は、さうしなければ治められないでせう。ツアーが專制政治を布いたのも無理がない。そしてあなたが、民主黨專制の國家を夢見るのも當然ですな。」

レーニンは、彼にもなく、少し狼狽して、辯解した。

「ツアーの政治は、資本主義と結んで國民を搾取したのです。しかし、われ等は、萬民の幸福を目ざして政治を行ふのです。」

「その點はよくわかります。なにも私は、非難するのではありません。露西亞といふ國と比較して、わが日本の朗らかさ明るさを思うたのです。」

レーニンは、大佐の眞意を解して、しんみり言つた。

「まことにさうです。露西亞は暗い國です。私は、まだよく日本といふ國を知りませんけれど……」

大佐は言つた。

「わが國には、あなた方にとつては想像も及ばない尊い一つの存在があるのです。」

「それは何です。」
「萬民の幸福を幸福とし給ふ、天皇陛下の大御心です。」
「……」
「ツアーはさうでなかつたのですか。」
「斷じて！」
「かうした大きな心をどう思ひます。」
「國を治める者として、最高の道德です。」
「しかし、レーニン君、さうした高い境地に、人一代の修養によつて達することが出來るでせうか。」
「殆んど不可能でせう。」
「私もさう思ひます。二千五百年の間、君臨されたわが天皇陛下にして、はじめて、持ち得させ給ふ最高の愛です。」
「われ等は、その高い愛を制度化するのです。」

「なるほど、しかし、その制度は絶對のものではありませんね。」
「……」
「たとへば、あなたが作つた制度に對しては社會革命黨は反對するでせう。そして彼等が勢力を獲れば、再び革命が行はれるでせう。レーニン君、さうではありませんか。」
「仕方がありません。これが露西亞の運命です。」
レーニンは、きつと口をつぐんだ。鐵のやうな意志の力が感じられた。大佐は、輕くこれを見くだした。日本の明るさを思ふた。
やがて、大佐は約束の××をレーニンに渡した。
かうして、千九百〇四年十月一日は、終りを告げた。

5

第二日――
サチョー公爵邸は、風雲の第二日を迎へた。訪問者は、フランス衆議院の副議長にして、社

會黨の首領、ジョウレス、文豪アナトール・フランス、クレマンソー、プレサンセー博士等、フランスの思想界を代表する屈指の人々であつた。

今日の主人公も亦シリヤクスだ。會の名は、露人の友——革命諸黨の運動を後援しようといふ會合だ。

これは、シリヤクスが、最初から表面に立ち、大佐は全く黒幕の人として顔を出さず、彼等名士の間を奔走し、遂に名士の共鳴を得て、聯合會議を機會に、この會が成立したのだつた。

從つて大佐は、今日も顔を現はさぬ。

後に總理大臣になり、フランスの老虎と言はれたほど、いかめしい顔をしたクレマンソー。いかにも巴里の紳士らしい、燃ゆるやうな情熱と、天かける如き朗らかな情操の持主ジョウレス——彼は歐洲大戰の當初非戰論を唱へて政府に反對し、暴漢の兇刄に斃れたが、フランス政府は、國士として、彼の死を悼んだ。いかにも、しつとりした感じを抱かせるアナトール・フランス。いづれもフランス一流の世界的人物、紫煙をくゆらしつゝ、無雜作にソファにもたれてゐるさまは、昨日の會議にくらべて鋭くせまるものはないが、もつと〳〵チャーミングな空

氣をかもしてゐる。

シリヤクスが、各派の聯合が無事に成立したことを告げると、先づジョウレスが、

「シリヤクスさん、ほんとに御苦勞でした。」

と、わが事のやうに感謝した。

「いや、ほんとに、大きな仕事をなされた。」

クレマンソーも言つた。

いかに聯合が困難であるかといふことを彼等も知つてゐたのだ。

アナトール・フランスが、つゞけた。

「僕は露西亞人は嫌ひではない。國民として實にいゝ素質を持つてゐる。フランス人にない素朴さ、根强さ、正直さを持つてゐる。しかし、その政治は實に暗い。その陰險な政治が、折角の彼等の素質をゆがめ傷けてゐる。われ等の北方に、暗い大陸を持つてゐることは、實にうつとうしい。」

「それにしてもだ。」

プレサンセーが聲を高めた。

「今度は實にいゝ機會だつた。あの貪婪なツアーが、日本に手を出したのは、自ら墓穴を掘るやうなものだ。」

「日本といふ國は實に愉快ですな。たしかにあの民族の活動は世界の驚異だ。」

ジョーレスが感嘆した。

「うむ、よくも勇敢に露西亞と戰つたものだ。しかし、貪婪はツアーのみではない。わがフランスの政治家だつて、東洋に對しては非道な慾心を持つてゐる。日本は、白人全體へ對して宣戰したのだ。白人の侵略行爲に對して……」

クレマンソーが莊重な言葉で和した。

「君等は、日本の藝術品を知つてゐるか。」

フランスがかう言ふとみんな頭をふる。彼はつゞける——

「僕は最近、幾枚もの日本の繪畫を見た。實に驚くべきものだ。その色彩に對する敏感さ、線が持つデリカシー、この民族は藝術的にも決して白人に劣つてゐないのだ。いや、その自然に

對する態度、觀察、表現は、行きつ詰つたわが畫壇に、きつと何等かの光明を與ふるに違ひない。」

かうして、彼等は日本を論じ露西亞を論じ、世界の大勢を論じ、談論風發、つくるところを知らない。シリヤクスは、感嘆して謹聽する。がやがて、問題の中心に觸れ、後援會として次ぎのことが決議された。

A、佛露同盟の破棄

B、日本の支持

C、露西亞帝政の暴露

D、革命諸黨の激勵

そして、ユマニテー、ジルブラー、ヲーロル、アルメニアン、ジョールジヤン等の新聞を機關として、筆をそろへて、決議條項を强調することを申し合せた。

「時に、シリヤクスさん、この家の御主人にお目にかゝりたいが……」

クレマンソーが、非常に眞面目な顏で言つた。

「や……それは……」

シリヤクスは當惑さうな顔をした。

ジョーレスが、意味あり氣に、

「ね、ね、シリヤクスさん、なにも御心配になることはありません……われ等はよく理解してゐます……そして又決して他言は……」

「會つて見たいですな。」

フランスまで熱心に目をかゞやかす。

シリヤクスは　一寸考へたが感激して叫んだ。

「ああ、なにもかも御存じの皆さんです。ではサチョー公爵をおひき合せいたしませう。」

シリヤクスは出て行つて、やがて二人では入つて來た。大佐だ！

人々は、大佐をとり圍んだ。そして固い握手がとりかはされた。

「サチョー公爵、私はジョーレスといふものです。非戰論者ですが、このたびの御國の立場は充分に認めます。」

「感謝いたします。」

大佐は頭を下げた。

「僕はクレマンソーです。公爵、あなたの御活動によつて、日露戰爭の意義が二重にも三重にも深められました。」

大佐は頭を下げて言つた。

「皆さん、私は一介の武邊です。只、困難なわが國の立場が、私をして立たしたにすぎないのです。私の行動が、露西亞國民にとつて果して幸福をもたらすか、どうか、私は確信を持たないのであります。」

これは、實に思ひ切つた言葉であつた。しかし、この卒直な言葉は、かへつて、相手に好感を與へた。

「いや公爵、あなたの行動が、露國民にとつて幸福をもたらすことは、火を見るよりもあきらかです。」

プレサンセーが言つた。

大佐は應へない。今、大佐の立場は重大だ。交戰國として露西亞の攪亂を策するは當然であ

つて、後世これが曝露するも敢て國際的道義にもとるものではない。しかし、思想的に、露西亞の革命諸黨と手を握り、これをたすけるといふことになれば、戰爭の有無にかかはらない。たとへ交戰中でなくても、これをなし得るのである。帝國の軍人として責任ある大佐が、他國の內政を攪亂するといふ疑ひを現在はとにかくも後世に殘すことは重大な失態でなければならぬ。だから大佐は、はつきりと自分の立場を闡明したのである。

「いかゞです、公爵！」

プレサンセーが、大佐の共鳴を求めた。

と、クレマンソーがさへぎつた。

「君、止し給へ、あなたのお考へは、充分に理解しました。實に見あげました。」

「感謝します。」

大佐は、短かく、眞實に答へた。

ジョーレスは、大佐の迎合しない態度がいかにも愉快に感ぜられたやうだつた。フランスは、ぢつと味はうやうに、大佐の言葉をかみしめてゐた。そして話題を變へて、日本の俳句や

繪畫について質問を始めた。

彼等は滿足して歸つて行つた。そして翌日から、猛烈な露政府攻擊の論文が、上記の新聞に又、雜誌に揭げられたのは言ふまでもない。すると、これに附隨して他新聞までも、堂々と露國の敗戰を豫告し、露政府の東洋政策を非難し始めた。

又、或る半官的新聞は、眞面目な論調をもつて、

「露西亞の募債に應ずるなかれ、それは各個人を損失に導くのみならず、フランスの財界を紊亂にさそふものである。」

と放言した。

二、夜の舞姫

1

大佐は、繚爛としてかゞやく宵のオペラ街を、悠々と漫歩してゐた。光は麗人のさゝやきにまたゝき、音樂は行人の瞳におどる。馬車、貴婦人、娼婦、媚、唇、求むる目、泳ぐ足、脛を洗ふ風……。

大佐は、探偵の尾行をおそれなかつた。半歳に餘る苦心の謀略は、遂に成功の緒についた。不平黨聯合は成り、フランスの名士は動き出した。今は只、その効果を待つて、おもむろに、第二の策を練るのみだ。完全に露西亞の探偵網をのがれることは到底不可能事だ。しからば、

こんな時こそ、自らわが身を彼等の目にさらす時だ。

女探偵サーシヤ――大佐は、まだ彼女の本體を知らない。彼女が出現して以來、探偵の態度が陰性になり、マノニロフさへも、姿を見せず、しかも、ぢり〳〵と大佐の身邊にせまつてくるのだ。場合によつては凶刃さへもふるひかねぬのだ。ロンドンのホテルで、黨員が殺された時、大佐は、決して自分に對しては危害を加へないだらうと斷言したが、それは黨員を安心させるための言葉、內心は、注意深く武裝してゐる。

しかし、事もなげに歩いて行くエトランゼー、大佐明石、いつしか大通りをすぎて裏町には入つて行くと、大佐は、ハタと足をとめた。

ロシヤ美人のバレーダンスと銘打つた小さな寄席の前だつた。その寄席にかゝげた看板のペンキ繪が、大佐の足を釘づけにしたのだ。

「おう、レオンチバー！」

大佐は思はず口走つて、その、極探色のペンキ繪を見上げた。下等なまづい繪だ。しかし、その、あざやかな顏のりんかく、燃ゆる瞳、よくのびた脚――それは、かの革命少女レオンチ

バーの特徴をうつして餘りあるではないか。

（彼女は捕へられた。銃殺はまぬがれたとしても、牢獄か、どこかの流謫地に呻吟してゐる筈だ。）

大佐は、幾たびか目を疑つて否定した。しかし、大佐は、このまゝ通りすぎることが出來なかつた。少女が大佐に與へた印象は深い。思ふだに胸が痛むのだ。

（彼女でなくても宜い。似てゐるだけでも……）

大佐は、胸にからむ、少女の姿を拂ひかね、思ひきつて、木戸をくゞつた。

舞臺には、一人の男が獨唱をつゞけてゐる。彼は、勞働者風に革の服を着て、勞働者がするやうに、頸にハンカチをまきつけてゐる。モンテギュウスといふ、民衆詩人だつた。

彼は卑俗な言葉で憤激をうたひ、ブルジョアを諷刺し、勞働者の相互扶助について、火のやうな即興詩を歌つた。

一節が終る毎に、嵐のやうな拍手、賞讃の呼び聲が起つた。大佐は、いさゝか壓倒された形、思はず、觀覽席を見渡すと、八部通り勞働者が占めてゐる。モンテギュウスは歌ひつゞけ

る。拍手の嵐もつゞく……。

「大佐！」

誰だか、大佐の肩をたゝいた。

驚いて振り返ると、レーニンが、ニコ〳〵して立つてゐる。二人は低い聲——

「あ、まだこちらにゐられたですか。」

こんな所にレーニンを見出すことは、大佐にとつて意外だ。

「え、僕は、モンテギュウスが好きでね。」

「ははあ……」

「こちらに來ると、いつも彼の唄を聞くのですよ。」

「あなたがねえ……ふうむ……」

大佐は、思ひがけぬレーニンの趣味に感心する。理くつでかたまつたやうなレーニン、しかし、彼も、かうした感激を需めてゐる。彼は通俗を理解する力も持つてゐるのだ。

「時にあなたは？」

今度はレーニンがたづねる。

「いや、僕は只見學です。」

モンテギユウスの歌が終る。又拍手、共鳴の旋風！。

レーニンは、とけ入るやうに、聞いてゐたが、

「どうです、この勢は……」

「時代ですね……早晩、日本にもこんな時が來るでせう」

「勿論です。」

「しかし、日本には自ら、日本流の解決方法がありますよ。」

「あなたの御意見はよくわかります。たしかに、日本らしい解決方法があるにちがひありません。その國の傳統がさう單純にこわされるものではありません。」

「いや、レーニン君、それだけではありません。あなた方の合言葉――萬國の勞働者團結せよといふ奴ですね。その階級的利害關係が、果して、人種的な境界を突破し得るでせうか。人種とまで大きく言はなくとも、地域的な約束でもいゝです。世界人口の大多數を占めてゐる農民

を考ふる時、特に、この感が深いですな。」

「農民は駄目です。」

レーニンは、かう言つて、はつとした。

大佐はすかさず、

「なるほど、して見ると、勞働者は、あなた方の軍隊となつて、農民を監視するわけですな――恰度、ツアーの軍隊のやうに。」

「いや、そんなことはありません。」

レーニンは、狼狽して辨解した。

「冗談です〳〵。」

大佐は笑つたが、やゝまじめにつゞけた。

「でも、レーニン君。あなたが天下をとつたら、萬國の勞働者云々といふ階級戰を看板に、その勞働軍を押し立てゝ滿洲あたりに進出して來さうですね。」

「大佐、そんなこと……」

「はつはつは……東方侵略はイヴァン皇帝以來露西亞の傳統です。この傳統が、果してあなたの手で絶ち切れるでせうか……」

レーニンは答へず、ぢつと考へた。

大佐は猶言ふ——

「さうなると、再び、日本の天皇主義と、露西亞の民主黨專制主義が、衝突することになりますね。……しかし、眞に世界が融合するまでには、戰爭は仕方のない進化の過程でせう。」

レーニンは強く言つた。

「大佐、僕は、自分の國のことで一ぱいです。他國のことは考へてゐないのです。」

大佐は、意味深くほゝ笑んで、何か應へようとした時、觀覽席の電燈が消え、りゆうらうたるオーケストラにつれ、コブランまがひの揚幕が、靜かにあげられた。

背景は黑い幕——その幕の前に、まばゆき脚光をあびて立つてゐる純白の少女！　破れるやうな觀衆の拍手、口笛、かけ聲……

2

大佐は、息をのんで、目を見はつた。まさしく彼女だ、レオンチバーだ。別れた時にくらべると、脊丈ものび、肉つきも女らしくなつてゐる。ペルシャの王女にでも扮してゐるらしい、純白のあや絹につゝまつた彼女の肢體は、妖艶なまでに美くしく、見事な均勢を保つてゐる。端正なその顏は殉教者のやうに嚴肅、只、特徵のある、あの情熱の瞳だけが、爛として輝いてゐる。

（おう、やつぱり彼女であつたか！）

奇遇に波うつ、よろこびが、息づまるほど、大佐の胸にこみあげて來る。しかし、大佐は見るに堪えない。大佐は、傍にレーニンがゐるのも忘れ、よろけるやうに座席をすべり出た。

レーニンが追つかけて來た。

「大佐、どうかしたのですか。」

「一寸、氣分が惡くなつたのです。おさきに失禮します。」

「ああ、さうですか、僕は明日スウイスに歸ります。そして……」

二人は顔を見合せて、うなづきあつた。

大佐は外に出ると、ホツと息をついた。そして、小さくつぶやいた。

（レオンチバー、よく生きてゐてくれた。お前のおかげで、大事はまさに成功したぞ……會はねばならぬ、會はねばならぬ。あつて、わけを聞かなければ……）

大佐は寄席がはねる頃の時を見はからつて、今度は樂屋口に現はれた。手には花束を持つてゐる。特別の注意を惹かぬため、ファンのする通りにしたのだ。

レオンチバーの藝名は、アマリーナ孃となつてゐた。大佐は、道具方らしい男に、フラン紙幣の一枚を與へて、アマリーナ孃に會はしてくれるよう頼んだ。その男はニヤ〳〵して、小さく仕切つた部屋の前につれて行つた。

「アマリーナ孃の樂屋です。どうぞ……」

彼は、去る。いくつもの男、女の顔が、大佐をのぞく……、

大佐は、ノックする。

「誰あれ？」

中から、彼女の聲。

又ノック。

足音……。

ドアーが、ぱツと開く……

「あツ！」

レオンチバーは、よろ〳〵と後へ……。

大佐は、つとはいつて後をしめた。

レオンチバーは、まだ、わが目を信じないかのやうに、棒のやうにつつ立つて、まじまじと大佐の顔を見つめてゐる。

「レオンチバー！」

大佐は、なつかしげに聲をかけた。

「おう、アカシ……ああ、やつぱり……」

レオンチバーは、大きく息をはずませて叫んだ。目はぱッと輝き、胸は波打つた。そして、人魚のやうに身をおどらせて、大佐の胸に身を沈めた。矢張り無邪氣な少女だつた。

大佐は、少女を抱きしめた。

「レオンチバー、あなた、よく生きてゐてくれたねえ。」

「え、アカシ、あなたもよく、こちらにゐらつしたのねえ。」

二つの目に涙が光つた。

ドアーの前のさゝやき——きつと、ほかの女優たちが、すき見してゐるのだらう。二人は、つとはなれた。大佐が持つて來た花束が落ちてゐる。少女は拾ひとり、きまり惡げに頰ずりした。

「アマリーナ孃、外に出ませう。」

大佐が言つた。

「え、お供いたしますわ。」

二人は外に出た。大佐は用心深くあたりを見廻した。

尾行らしい影はない。

「どこに行かう？　僕のうちにするか……」

「あたしの下宿にしませう。さう遠くないところよ……」

「ああ。」

大佐は馬車を呼ばうとした。レオンチバーが手をふつた。

「歩きませうよ。」

二人は親と子のやうに手を組んで歩き出した。

レオンチバーは、その後のことを話した。彼女は、ある恐ろしい陰謀の共犯者として、獄に投ぜられ、他の共犯者は死刑に處せられたが、彼女は、年が若いといふので、エニセイ縣のミヌシンスクといふ、シベリヤの寒村に五年間の流刑に處せられた。しかし、彼女は、じつと刑の明くるのを待つてゐることが出來なかつた。彼女は、遂に脫走を企てた。そして死に勝る困難を冒しあやふく露西亞の國境を越えることが出來た。この年の八月のことだつた。彼女は、第一に、ストツクホルムにカストレン氏を訪ねた。しかし、カストレン氏は、もう元の住所にゐ

なかつた。彼女は、方々と、同志を求めて流浪したが、誰にもめぐりあふことが出來なかつた。すつかり旅費をなくした彼女はパリーの場末に部屋を借りた。そして職を探してゐるうちに、ふと、すゝめるものがあつて、今の一座には入り、忽ち、スターになつたのであつた。

話し終つて、レオンチバーはためらひ乍らたづねた。

「あなた、カストレンさんにおあひになつて……」

「ああ、會つたよレオンチバー。そして……。」

大佐は、不平黨聯合運動のことを、かいつまんで話した。レオンチバーは、息をはずませて聞いた。目は一さう熱く輝き出した。

「まあ、アカシ、では、あなたもあたし達の同志だわね！」

「……」

「ぢや、あなたは同志達の住所を知つてゐらつしやるわね。」

「知つてゐる。しかし……」

大佐は、ぢつと、いたまし氣に少女を見た。

「だけど、レオンチバー……あなたは、これから直ぐ日本に行きませんか。」

「あら、どうして……アカシどうして……」

「……」

大佐は、再び、彼女を運動の渦中に飛びこませたくなかつた。しかし、彼女の火のやうな情熱、鐵のやうな意志を、今また彼女の目の中に見出して、ため息をついた。

レオンチバーも、すぐ大佐の厚意、思ひやりを心に感じたらしく、切なくあえいだ。

「ああ、アカシ……あたし、死を覺悟してゐますわ……」

塀にはさまれた暗い通り——

大佐は、はツと身構えして、後に少女をかばうた。しん〳〵とせまつてくる殺氣を、ふと、おぼろの中に感じたのだ。

「どうしたの、アカシ……」

「しッ！」

塀の背後から幾本もの大樹の枝が、道の上に、おひかぶさつてゐる。大佐は、所々の闇のか

たまりに目をくばり、少女を後に、一歩々々、靜かに歩き出した。

一ツの曲り角。

大佐が足をふみ出した瞬間、礫のやうに飛びかゝつた眞黑な塊——怪漢。

「エイ！」

大佐の肺腑からもれた低い氣合。

「むう……」

怪漢は宙に、うなつてどたり！　地上に轉落する。とたん、手をはなれた匕首！

大佐は、とつさに、レオンチバーを抱えて四五間も駈けぬけて身構える。しかし、二度とかつて來る模樣がない。又さつと一町あまり……。振り返ると、二つの黑影、一つは今の怪漢、それをひき起してゐるのは女の姿。

「うむ、サーシャといふ奴だな！」

大佐は、うなる。

「あなた、あぶなかつたのねえ。」

レオンチバーがぽつとして言ふ。

「露西亞の探偵だよ。ちやんと尾行してゐたんだな……」

「どうしませう。あたしのことも知つてるかしら……」

「知つてると思はねばならぬ。とに角あなたの下宿に行つて見よう。そして、よく相談しよう。」

もう、直ぐ、レオンチバーの下宿だつた。二人は駈けるやうに急ぐ。

3

數日後、レオンチバーは、ヨーハンに護衛されてロンドンに出發した。大佐はチヤイコフスキーに彼女の身を托するよう思案したのである。チヤイコフスキー氏は、彼女が最も崇拜する人物、レオンチバーは喜んで大佐の指圖に從ふたのだ。

サチヨー公爵の名で借りてゐた大佐のかくれ家もあやしくなつた。大佐は、これを機會にストックホルムに歸ることにした。が、大佐とて、只、露の探偵の目から脫れるだけに汲々とし

てゐるのではなかつた。大佐の間諜網は、彼等の虚をついて、露西亞内地に、各國に、巧妙な活動をつゞけてゐる。

チャールスが、勢こんで飛びこんで來た。

「旦那、やつと例の事件がわかりました。今一人連れて來ましたが、○の方は頼みます。」

「よし、とに角連れて來い。だが大丈夫か、逆間諜ではないだらうなあ。」

「まあ、會つて見て下さい。」

チャールスは、ニヤリと自信ありげに言ひ棄てゝ出て行つたが、すぐ、一人のロシヤ人を連れて來た。

「旦那、サブリンてつて、つい昨日まで、露西亞探偵局で働いてゐた腕利きです、どうか、これから、目をかけてやつて下さい。」

チャールスが口を添えた。

サブリンは、上目づかいに大佐を見上げて頭を下げた。

「先づ話を聞かう。」

大佐はニコリともせず言つた。

「旦那が取引きについて、正直でゐらつしやることは、この方から聞きました。私が特に、旦那に見て戴きたいのはこれです。」

サブリンは、かう念を押して、持つてゐたカバンから、一冊の部厚な帳簿を出して前においた。

「旦那、これは、貴國外交關係の電報の符合帳です。」

「なに！」

さすがに大佐も驚いて目を見はつた。

サブリンはすかさず——

「買つて戴きたいと思ひます。」

「うむ、しかし、こんな物が、やたらに君達の手に入るわけがない。」

サブリンは、得意に嘲笑つた。

「はは……偽物だとお考へになりますか。だつたら、一つお試しになつてはいかゞです。」

大佐は、外務省の電信符號は知らなかつた。しかし、事は重大だ。早速、公使館に電話をかけて、係りのM氏に來て貰つた。

M氏は驚きながら、鑑定した上、暗號文をつくつて、サブリンに渡した。サブリンは符合に照らして的確な平文に譯した。

疑ふ餘地はない。殘るは、いかにして、これを手に入れたか——その經路だ。しかし、サブリンは、なか〳〵その事を話さうとしない。取引きを有利にするための斷け引きだ。

大佐は、これを察して、先づ、符合帳の取引きから始めた。

「いくらで賣るか。」

「さあ……一萬フランではいかゞです。」

「高い。もう、すでにこの符合は使用してゐないのだ。」

一錢一厘だつて、國民の金だ。出來るだけ安く値切らねばならぬ。

「へえ、さうですか……」

サブリンは、疑はしげにニヤリとする。

「さうでなくても、知つた上は使用はしない。又、符合帳の寫は、これ一冊ではあるまい。」

「だ……旦那、それはひどい……」

「事實を言へば、これを買ひ取る必要はない。買ひたいのは他にある。それは、これを手に入れた經路だ。その事を話すことを條件に五千フランで買つてやる。」

「ようございます。おつしやることは理ぜめだ。お話しいたしませう。」

サブリンは、やつと承知して話し出した。

話は、去年、千九百三年に戻る。當時サブリンは、露國の國際探偵局の外國電信係をつとめてゐた。その任務は、各國の電信符を盜みとることであつたが、日露の關係が切迫するや、彼は、日本の電信符合を手に入れる特命を受けた。その命令を遂行するため、サブリンが目をつけたのは、電信符合を餘り頻繁に使用しない××××の日本公使館であつた。幸に、そこの公使は、獨身者で、英語以外の外國語を知らないことなどもたしかめたので、彼は、近頃探偵局に入つた一人の女を連れて××××に出張した。その年の十一月末のことだつた。

その女は、美人で、そして、踊子で、外國を廻つたことがあつて、英語も話すことが出來たので、早速、手づるを得て、××××婦人といふれこみで日本公使館の女中に棲みこませることが出來た。

やがて、その女は、日本の電信符合が、公使專用のデスクのひき出しに、しまつてあることをたしかめた。たゞそれを盜み出すだけならば何の雜作もなかつたが、それでは公使が氣がついて、同じ符合を使はなくなるから、目的は達せられない。

女は、まづ公使が持つてゐる合鍵と同じものを作るために、封蠟をとかして、ドアーとデスクの合鍵の型をとつた。これは勿論、公使が寢室に入つて熟睡してゐる間にやつた仕事である。

合鍵が出來ると、矢張り公使の熟睡を待つて、デスクから符合をとり出して、ボーイ頭に渡す。ボーイ頭は××××人で、既に買收してある。ボーイ頭は、公使館に程遠からぬホテルに陣取つてゐるサブリンの所に駈けつける。そして、夜明け方には又、それを持つて、公使館に歸る。女中は受けとつて、又そつと元のひき出しに入れておく。女中もボーイ頭も公使より早く起きて働くことになつてゐるから、誰の目にもつかない。

サブリンは、こゝまで話して、得意の鼻をうごめかした。

「ね、旦那、わたしは、符合が自分の手にある三四時間の間に、これを一枚々々、寫眞に取つたんです。そして、この五六百頁もある大冊を、わずか十日足らずで、寫し取つたんです。これが終つたのが十二月の中頃、わたしは、その後のことは知らないが、おそらく、日本と、駐露日本公使館との電信はつゝぬけに、政府の方にわかつたことでせうよ。又、今でも各國の電信局に露國のスパイがゐないとも言へませんからね、へつへつへつ……」

あまりの巧妙さ、大膽さに、大佐もM氏も啞然となつた。

大佐は、たづねた。

「その女といふのは、何といふ者だ。」

サブリンは、又ニヤリとした。

「はつはつ……旦那、今の探偵長、サーシャでさあ。旦那はよく御存じの筈です。」

「うむ……」

大佐は、思はず唸つた。

しかし、かほどのサーシャではあつたが、自分の昔の合棒が、敵の間諜に誘惑されてゐることには氣がつかなかつたらしい。

さて、大佐は一たん呼び寄せたリエスをともなひ三たびストツクホルムへ。そこには又、一事件が待つてゐた。大佐の手記のまゝを記しよう——

在露の間諜某、獄に落つ、判官詰て曰く、ストツクホルムより、汝に送金せし者あり、まさに余が手に保管す。其の差出人は、カール・ミューレルとあり。其の人物の住所、職業、汝との關係を詳さに申し立てよと。某、取り敢えず親戚なりと答へ、密かに牢使に托し、書を投じて曰く——カール・ミューレルなる實際の人物を探し、これによつて、余を救へ、然らずんば死を免る能はずと。余等、某々等と苦心して之を求む。某姓名錄にこの名を發見す。即ち金をおくりて、某を救助せんとし、訪問するに、既に鬼籍に入れる人なりき。よつて遂に某を救ふこと能はざりしも、後、牢を破りて脫出、行衞不明となれり。

一三、第一革命へ

1

巴里會議の結果――

露西亞第一革命のスタートは遂に切られた。

ポーランドの社會、國民兩黨は、眞先きに反抗の烽火をあげた。農民は、獨立を叫んで各所に集合、官憲と抗爭し、兵役召集を拒否した。勞働者は、戰爭反對を絶叫して、罷工に移り、當然極東に出征すべき、數個師團の軍隊は、これが鎭壓に向つたが、勢、猖獗を極めた。

自由黨は、州郡會の議員、代言人、醫師會等を煽動して、政府攻擊の火の手をあふつた。

社會革命黨は、キエフ、オデツサ、モスコー等に、戰爭反對の示威運動を起した。

コーカサスの諸黨は、官吏の××十名を數へた。

レーニンは、ジュネーブにとゞまつてゐたが、形勢が險惡となると、黨員は毎日のやうにロシヤからやつて來て、レーニンの指令を受けた。ストライキ！ストライキ！ストライキ！側面からの煽動だ。

その他の諸黨も亦同時に活動を開始し、軍隊の輸送は各所に故障を生じ、召集拒否、脫走等の不祥事が續出し、歐露の天地は冬を迎ふると共に、やうやく暗雲にとざゝれはじめた。

さうでなくとも日露戰爭に對して、露西亞の大衆は、最初から氣乘りがしなかつた。がそれは必ずしも大衆のみならず、ブルジョア、知識階級の間にもおそろしく不人氣であつた。

それに、最初は秘密にした敗戰が、かくしきれずなると、不人氣は次第に不平へと轉化し始めた。實際、開戰前の豫想に反し、日本軍は餘りに强かつた。

宣戰が布告された時、前陸軍大臣ワンノスフキーは、この戰爭の見込みについてクロバトキンと協議した。その際彼等は次の問題に關して意見を異にした。卽ちワンノフスキーは、日本兵二人に對してロシヤ兵一人の割當にして充分だと考へ、クロバトキンは日本兵一人半に對してロシヤ兵一人の割でいゝと考へたのである。

だのに、彼等の豫想は見事に裏切られ、五月一日には鴨綠江に、五月十日には鳳凰城に敗れ、五月五日に日本軍は、鹽大澳に上陸し、旅順への進擊を始め、旅順は孤立におちいつた。ついで、敗れに敗れた露軍はその年の十月、沙河において攻勢に轉じようとして一大逆襲を試みたが、これも、見事に失敗した。一方海軍は、三月にマカロフ大將が旗艦と運命を共にして沈沒して以來、逐次勢力をそがれ、旅順港內深く、逼塞してしまつた。

同時にこの敗戰の結果は、ロシヤ產業の發達に新しい危機を引き起した。失業者は巨大な數にのぼり、巨額な軍事費は、多額の紙幣發行を餘儀なくせしめ、その結果として貨幣の價格を減じ物價は暴騰した。

かうした經濟的事情も加はつて、國民の戰爭への不平はたかまつて行つた。しかし、國民一般の無知識と、政府の威力と宣傳は、猶よく、その不平を表面に現はさずにすんだ。

政府は、あらゆる手段を講じて、日本へ對する國民の敵慨心を挑發しようとした。

クロバトキンは「豫定の退却はすんだ。わが軍は、もはや一歩も退かぬ。」と宣言し、日本軍の露西亞の捕虜、戰傷者に對する慘虐な行爲を揑造して流布せしめた。

又、政府は、異教徒日本人が、キリスト教徒に對するありもせぬ迫害のさまを、ポスターにして、無知識で、信心深い農民に宗教的義憤を起させようとした。

皇帝は、出征する軍隊への別離の挨拶のために各地に行幸された。そしてこの軍隊に、聖像を與へて、兵士等を激勵し、祝福されたのであつた。

かうした、政府の必死の宣傳は、一部の尖銳分子をのぞいて、可成りの効果をおさめ、決戰

にそなへる出征兵士は、續々としてシベリヤにおくりつゞけられた。

そこへ、各黨の活動がはじまつたのだ。

彼等は、戰爭の原因を曝露し、この戰爭がツアーの多慾から起つたものであることを痛烈に指摘した。そして悲しいかな、國民は、これ等の宣傳に、より敏感だつた。魅惑を感じた。しかしもちろん、彼等と共に踊つたのは、ロシヤの總人口から見れば、極く少數に過ぎなかつたのであるが、國民の多數は積極的にツアーを支持するだけの、理論も感情も持つてゐなかつた。ツアーを支持するのは、その權臣と、ごく無知な農民だけで、その他は、日和見的な知識階級と、無關心な農民が大多數を占めてゐたのである。

2

大佐は、露の探偵と戰ひながら、猶ストツクホルムにとゞまつた。しかし、大佐の悠々閑々たる態度は、たしかに、探偵に或る油斷を與へたにちがひなかつた。

とは言へ、大佐は決して武裝をとかなかつた。大佐は、探偵長のサーシヤが、自分に對し

て、探偵以上の敵意を抱いてゐるのを感じた。大佐は決して夜は外に出なかつた。そして晝は、いかにも、のん氣さうに、ソリをとばしたりした。

が、その悠々たる間に、巧妙なる通信法で情報は、相ついで大佐の許に達した。探偵等はリンドベリーが通信の中繼をしてゐることにさすがに氣がつかなかつたのだ。大佐とリンドベリーは、いつもそれとなくクラブで會つて用をたしてゐた。

各派の活動は、充分に大佐を滿足せしめた。その動員妨害は豫想以上に効果を奏し、その妨害を鎭壓するため、動亂にそなへるため、政府は非常に多數の軍隊を歐露に配置せねばならなかつた。これは、最後の決戰を覺悟して、奉天附近に兵力を集中しつゝある露軍にとつて容易ならぬ打擊だつたのである。

しかし、日本からの通信は決して、かんばしいものではなかつた。日本は、兵力、軍需品ともに、既に缺ぼうを告げつゝあつた。バルチツク艦隊は、既に遠征につき、しかも旅順は落ちなかつた。

大佐は激勵の電報を絶えず、各派の首領におくつた。歐露の攪亂——これ以外に、日本とし

て取る手段はないのだ。

十一月の初旬――

突然、何のさきぶれもなく、レオンチバーが社會革命黨員につれられて大佐を訪ねて來た。

「どうしたんです、レオンチバー」

大佐は、なにか不吉な豫感に胸を痛めながら、ぢつと入口に立つて、大佐を見つめてゐる少女を呼んだ。

少女は、後に立つてゐる黨員に頼むやうな目をなげた。

黨員は去つた。

少女は口を開いた。

「アカシ……お別れに參りましたわ……」

「なにお別れ！」

「え……これを。」

少女は、チヤイコフスキーから、大佐にあてた手紙を出した。

大佐は、いそがしく封を切つた。

――余は貴下が、レオンチバーに對し、並々ならぬ愛情を傾けておらるゝことを知る。しかし、わが革命黨は、ロシヤ一億五千萬國民の自由と幸福の名において、彼女を求むる。彼女の意志も亦、こゝにあり、余は涙をふるつて、彼女の奮起を求めた。彼女は死を決して△△に潜行する筈。余は貴下と共に、彼女の成功を祈るものである。

大佐は、嘆息をおさへて力なくほゝ笑んだ。

「レオンチバー……成功を祈る……」

少女も、片頬で微笑したが、ホロリと涙をおとした。

「有難う……アカシ……こん度こそ、もうあへないわ……」

「あなたは……それでも……」

大佐は、制へきれず言つた。

少女は、あはてゝ、強く、

「覺悟してゐます。私は勇んで行くのですわ。」

大佐は、目をつぶつてうなづいた。

「見事だ！　見事だ！」

目をあけると、涙がころげおちた。

「行きなさい……レオンチバー……」

少女は、つと寄りそうて、ひざまづいた。そして、大佐の膝に兩手をおいて見あげた。

「アカシ……お別れよ……お別れよ……」

涙は、見ひらいたまゝの瞳から、せきを切つてあふれ出た。押へきれぬ悲しみにひきよがむ顔……

「アカシ……お別れよ！」

少女は、もう一度叫んだ。

大佐は、唇をふるはしたゞけで、何とも言ふことが出來なかつた。顔全體が泣きさうになつたのを、ぐつとこらえたのだ。

3

十二月になつた。各黨の活動は益々猛烈に、その範圍は廣められ、人員は倍加した。

十二月もすぎて、千九百〇五年の新春は迎へられた。

旅順は遂に陷落した。

三日に、ペテロブルグのプティロフ工場の職工が罷業を宣言した。七日にはこれに誘はれた勞働者十四萬人が罷業に入つた。そして、遂に一月九日の日曜日、布教師、僧ガポンにひきゐられ午後二時までに宮城前の廣場に集まるよう、露都全勞働者が申し合せた。彼等は、直接、ツアーに嘆願書を出すことに決意したのである。

その嘆願書には、勞働者の地位向上に關することばかりでなく、憲法の制定、國民の意志に從ひ、速やかに日本へ對する戰爭を休止することが强調されてあつた。

そして次ぎの言葉でむすばれてあつた。

「……重ねて乞ひ願ふらくは、我々の願望を容れられ、此處に誓ひの言葉を賜はらん事を。か

くして、陛下はロシヤを幸福に且つ光榮たらしめ、陛下の名聲を、永久に我々及び我々の子孫の胸底に感銘せしめられよ。我々の願ひを許容されずに、却下し給ふ勿れ。我々は陛下の宮廷の前で、この廣場に於て死に就かうとしつゝある。我々は、これから更に赴くべき處を知らず、且つ希はない。我々には進むべき只二つの路——自由と幸福の道か、然らずんば、墓場への道か……」

この事は、既に數日前から、その筋にはわかつてゐた。そしてゴルキー等を始めとして、有志達は、この嘆願が無事にすむやう、大官等に運動したが、政府は何等の緩和策も講ぜず、而も、勞働者の大群が未だ廣場に達せぬ前、突如くり出された軍隊のため、無慘にもふみにじられてしまつた。かくて、露西亞革命史上、有名なる血の日曜日は、ツアーと官憲の無理解により、千年の恨みを露都街頭に血ぬられたのである。

この嘆願のリーダーたる教父ガボンは聯合運動には加はつてゐなかつた。大佐の言によれば——

ガボンは當時職工の布教師として、いさゝか進歩思想を有せしまでにて、社會民主黨にも非ず、革命黨にも非ず、其の中間に在りて兩黨に親交を有したりしが、兩黨の煽動漸やく進むに當り、ガボンは、兩黨に關係ある職工にはさまれ、自然に押し出されたるものにして、只職工間に人望ありしといふに止まる。

のであつた。後ガボンは政府の間諜と認められ露都郊外で暗殺されたが、果して彼がスパイであつたか、どうか？　もと〳〵ガボンが指揮したペテルブルグの勞働者は、表面政府の御用團體（實際は民主革命二黨の尖鋭分子によつて指導されたが）で、ガボンは政府の大官と了解の上關係したものであつたから、スパイと言へば最初からスパイである。だから、やつぱり大佐の言の如く、時勢に押し出されて、遂にこゝまで來てしまつたもので、決して彼が計畫的に、勞働者の慘殺をたくらんだものでないことは明らかだ。その後の彼とて、決して、意識的にスパイを働いたものとは考へられない。彼も亦、暗黑のロシヤが求めた、いけにえの一人にあげられたものであらう。

とに角全歐洲はこの噂で持ちきり、しかも輿論は露政府の慘虐を痛憤し、大佐の發意になつた露人の友の會は、先頭に立つて、露政府の非人道を攻擊した。又、血の日曜日を目擊したと

いふ某外國通信員は大佐に告げて言つた。

――職工が、赤手のまゝ、兵士の銃火に斃れた時、彼等は絶叫した。「おう日本！　日本！　日本軍よ來れ！　おう、若し一大隊の日本軍があらば、なんでわれ等が慘殺されよう！」

プレシュコブスカヤ女史は、又或通信員に語つた。

「吾人は、人民のために惡魔と義戰する玆に數十年、未だ目的を達せず。今や吾人が敵國たる日本は却て吾人をして惡魔を退治せしむるの機を與ふ。吾人豈我が微力に赤面せざるを得んや」と。

實に、當時歐洲では、露政府の不人氣に比べ、日本の盛名は、突如現はれた、正義と人道の騎士のやうにもてはやされたのである。それは何が故？　それは決して戰に連勝してゐるからばかりではない。內に國民の一致團結があり、出でゝ正義の雄叫びをあげてゐるからだ。しかも、それはすべて國體のおかげだ。だが、この日本の立場は今日でも失はれてはゐない筈である。

かくて血の日曜日は、果然、全露西亞の勞働者を嚇怒せしめ、その時まで十年間の罷業人員總計は四十三萬人を越えなかつたが、この一月だけで、罷業者數四十四萬人に達し、僅に一ケ

月間に過去十年間を突破したのである。

又、この虛に乘じ、各派の騷擾は各地に連續した。卽ち、當時の動員區域であつた東中西部露西亞は、ポーランド、コーカサスの諸黨が力を極めて、その動員を妨害した。殊に、ゲオルギーの如きは、動員妨害鎭壓のために派遣された步兵若干中隊を包圍し、コーカサスの第一軍團の動員は全く撤回された。又ポーランドに於ては、その常設軍團を全く他に動かすを得ぬ狀態に至つた。フインランドには、盛に大官の××が續出した。

4

この擾亂の間に、大佐はストツクホルムを忍び出して、パリーに入り、當時パリーにゐた、革命黨の、ワンホヴスキー、チヤイコフスキーと會見し、この機に乘じ、一層猛烈なる活動を開始するため、第二次聯合會議を開催する議を進め、遂に、二月十日ジユネーヴのシモンといふ者の家で會議は開かれた。

がこの會議には、特に、過激な手段をとる黨派のみの參集を求め、これに出席したのはフイ

ンランド過激反抗黨、ドロシヤク黨、サカルトヴエル黨、白露黨、レツトン黨の代表者で、社會民主黨及びブンド黨も來會したが、又協同するに至らずして去つた。その理由は、レツトン黨（バルチツク沿岸州）の如きは黨派が小なるをもつて、これと同樣な決議權をもつて協同することは出來ぬ——といふのであつたが、レツトン黨がいかに强力な黨派であつたかは、その後ひきついゞた彼等の活動が物語つてゐる。しかし、こゝにも民主黨がいかに黨勢擴張に專心したかわかるのである。

この大會は

1、フインランド、ポーランドは露國版圖內からの獨立を認める。

2、露の革命黨は、現政府を打破して完全なる自由制度を露國內に布くを目的とす。

3、その他の藩屬諸國は聯邦又は完全なる自治を布くを目的とす。

大體以上の決議を了し、これを連繫として、大活動を開始する申し合せをした。そして、この決議は、レボルチヤラシヤといふ新聞によつて宣言した。

會議が終つた日、レーニンがこつそり、大佐に會見を求めた。

二人は、ジユネーヴの小さなホテルの一室で會見した。

レーニンは珍らしく昂奮してゐた。そして熱心に會議の模樣をきいた。

大佐は、一切を包まず、まつすぐに話して聞かせた。

聞き終つたレーニンは、動搖する心を押へるやうに、ぢつと考へこんだ。がやがて、クワツと目を見開いて言つた。

「大佐、改めて、わが黨も聯合に參加したいと思ひます。」

しかし、大佐は冷たんだつた。

「それは御自由に願ひたい。私としては、既に、あなたと握手してゐるのだから。……」

「それは、まさにさうです。しかし……」

レーニンは言ひかけたが、口をつぐんだ。

氣まづい沈默、大佐は水のやう、レーニンは、ヂリ〳〵してゐる。

今度は大佐が口を開いた。

「各派とも、おそろしい意氣込みです。もしかしたら、このまゝ、帝政轉覆まで行くのではな

いでせうか、レーニン君。」

「私は、この機會を失敗に終らせたくないのです。」

レーニンは、膝を進めて言つた。

大佐は、レーニンが昂奮してゐるわけを知つた。事實、民衆の動搖は、レーニンが豫想してゐたより以上だつた。しかも、これを動かしてゐる主力は、聯合參加の各黨だつた。帝政覆滅後、ぬれ手に粟の政權獲得を夢見てゐる彼であつたが、その時はあまりに早く、準備がとゝのはぬうちに來た。この大勢は、彼を威嚇し彼の冷靜をかきみだしたのだ。彼は、今聯合各派にひきづられやうとしてゐる。

「さあ、今となつて、各派はあなたの共同を受け入れるでせうか。」

「それは理由があるのです。」

「理由？」

「さうです。今回の會議に不參加は、わが黨のうちの右派であるメンシエヴイキによつて表明されたのです。われ等ボルシエヴイキは必ずしも協同に反對ではないのです。」

「なるほど、その理由は……」

レーニンは言ひたくなささうに顏をくらくしたが、つゞけた。

「メンシエヴイキの一派は、この革命の結果、明日の主人となるのは、ブルジョア自由主義であつて、その自由主義者は、斷じて、過激なる革命運動を好まない。今、わが黨が聯合に參加して、過激な行動に出ることは、革命後の反動を強くするものだといふのです。」

「しからば、あなた方の意見は……」

「私達は革命後の主人を、勞働者だと信じます。又斷じて、そこまで運ばねばなりません。」

「農民はいかゞです。」

大佐は、冷やかに言つた。

「……農民も亦、或は勞働者と共に……」

レーニンは口ごもつた。

大佐はつゞけた。

「農民のことは、革命黨にまかしてはいかゞです。」

「いや、事態は變化しました。今は大事な場合、農民と勞働者の完全なる提携が必要です。」

（この狸奴！）

大佐は心で叫んだ。

そして、きつぱり言つた。

「レーニン君。私は、只各黨の活動が、動員の妨害となり、背後の敵となれば宜いのです。その結果がどうなるか――私の關したことではないのです。又、關すべきことではないのです。明日の主人が、あなたになるか、革命黨になるか、それとも自由黨になるか、――それは、露西亞民族自身がえらぶでせう。申し出の協同については、私にでなく、幹事のシリヤクス君にお話し願ひたいと思ひます。但し、私としての物的援助は前通り變りないのです。」

レーニンは、沈默した。後悔の色が、かすかに浮んだ。しかし次ぎには、持ち前の强い意志が、むく〳〵と彼の顏の筋肉にもりあがつた。

彼は、釋然たる風で手をさしのべて、大佐の手を握つた。

「大佐、おかげで、はつきりしました。私達は、私達として、出來るだけのことをやつて見ま

せう。」

「おやんなさい。私は見てゐます。」

大佐はニツコリして握り返した。

一三、誰か知る

1

夜、深更、くらい並木町――

途中でレーニンに別れた大佐は、ホテルから、シモンの家に歩いてゐた。

（ドン！）

闇をつらぬく銃聲。

（シュッ！）

大佐の耳もとをかすめた彈。

大佐は、飛び退いて、立木に身をかくした。つゞいて二三發。

ピストルだ。

駈けつける靴音。――警官、町民……

逃げて行く影……

大佐は、何氣ない風で行き過ぎようとした。

「もし、今の銃聲は、どうしたんです。」

警官が呼びとめた。

「さあ、どうしたんでせうか……でも私は何ともありません。人違ひだつたでせう。」

「あなたの國籍姓名は……」

「日本人淺野。」

「當地の用件は……」

「觀光です。」

幸警官は、外國人になれてゐた。

「いや、失禮しました。怪我がなくてしあはせでした。」
「有難う……」
大佐は、頭をさげて歩き出した。
町民等は、いぶかしさうに大佐を見おくつた。
「大佐！」
後から、レーニンが追ひついて、聲をかけた。
「やあ、レーニン君。」
「銃聲を聞いたんで引きかへして見たんです。てつきり、あなたが狙撃されたと思つたものですから……」
「有難う、狙撃されたんですが、幸彈がそれました。」
「よかつたですな。勿論スパイでせう。」
「さうだと思ひます。」
「よほど、あなたを憎んでゐますよ。」

「それよりも、よく私を見つけ出したものです。」
「スパイの術にかけてはまさに世界一ですよ。」
「あなた方も、いろ〳〵なツアーの遺産をうけつぐわけですな。」
大佐は、にッとして言つた。
「はつはつ……」
レーニンは、珍らしく聲を立てゝ笑つた。
「さういふことになりますかな。」
「もう、ちやんと、遺産目錄が出來てるでせう。レーニン君、私は、あなたが明日の主人であることを信じますよ。しかし、何だか、明後日の主人ではないやうに思はれます。」
「なぜです。」
レーニンが、まじめに問ひかけた。
「私は、社會革命黨と民主黨とが、露西亞の兩面を現はしてゐるやうに思はれるのです。わけは、言はなくともおわかりでせう。そして、何だか、革命黨の方が、露西亞へ深く根をおろし

てゐるやうに思はれるのです。たゞ、革命黨は、明日の主人に不適當です。ツアーの遺産をすぐ受けつぐのには、どうも、あなた方が適當だ。革命黨では、工場の經營が出來さうに思へませんからね。」

レーニンは、これには答へず、からかひ返した。

「さて、私達が、ツアーの遺産を受けついだ時、貴國との關係はどうなりますかな……」

「はッはッ、レーニン君。私達は、あなた方が何と何を受けついだか、よく調査しておきますよ。あなた方は、きつと遺産を、ごまかして、有難くないもので、取引きをしようとするでせうからね。」

「なるほど……結構なお考へです。アカシイズムですね。」

レーニンは、笑つてさう答へたが、又まじめに、

「大佐、時に、各派との協同は駄目でせうか。アカシズムですね。」

「私にはわかりません。しかし、しつかりなさい。各派はなか〳〵優勢です。ことに藩屬諸黨が勢を得るのは、あなた方の遺産に關係しますよ。だが、この革命から、民族的感情を棄てさせ、階級的革命に持つて行く、あなたの戰法は、實に見上げたものですね。」

「大佐、われ等には、そんな政策はないのですよ。」

「はつはつレーニン君。私は、あなた方の理論には政略以外のものを見ることは出來ないのです。イヒヤヤヤヤ＋ツアーリズム＝ツアーニズムとはいかゞです。はつはつはつ……」

大佐は、むつとして立ちどまつたレーニンに、豪壯な笑ひをあびせ、

「さやうなら、タワリシチ、ロンドンで遭ひませう。」

かう言つて、大股に歩き出した。

2

大佐は、執念深い探偵からのがれるため、はじめて、白人に變裝して、ジュネーブを脱出、パリーを經てロンドンに潛入、チャーリンクロスの小ホテルに入つた。第二回の聯合會は、成功裡に終結したが、資金供給の問題を中心にして、大佐と、各派との關係は、ます〳〵密接になり、一日數度の密會を要する狀態となつたので、この事件の幹事等と大佐は、ホテルの東西

兩隅に分れて陣取り、人目につくのを避けた。

二月十五日、宇都宮大佐、田中中佐、上野が忍んで來た。大佐は、今日までの經過を述べ、三十八年一月偶感と題した一詩を示した。

遼水韓山斫二賊營一
三軍僚友皆功名
愚誠苦節何人識
策謁茫然對二明月一

大佐がこれを吟ずると、一座は腕をこまねいて暗然となつた。

思へば、僚友達は遼水、韓山に出征して、功勳赫々、武名燦として輝くに、こゝにゐる四人は、遠く戰地をはなれ、或は永遠に葬られるかも知れぬ、秘密の謀略に、その日をおくつてゐる。ああ、誰れか、この愚誠苦節を知るものがあらう。

大佐は、久しぶりに、日本人らしい感情の中にとけ入つて、皇軍を談じ、故國を語りあつた。

二月十七日。露西亞を亡命した、問題の、僧ガボンが、革命黨員につれられて訪ねて來た。

すつかり英雄にまつりあげられたガボンは、さも革命の急先鋒でゞもあるかのやうに、意氣揚々と、思ひきつた過激なことを言つた。そして、悲慘なあの血の日曜日のことを、さも自分の手柄でもあるかのやうに誇るのであつた。

大佐は、冷たく詰問した。

「教父、あの悲慘事について、あなたの責任は、非常に大きいものですよ。なるほど、あの事によつて、全露にわたつて革命的氣運はかもされました。しかし、それは、それ、これはこれです。その事によつて、あなたの責任が、消されたわけではないのです。あなたは、いかにして、このつぐなひをなさるつもりです。」

するとガボンは、突然、跪づいて祈りはじめた。

「在天の神よ、かの慘殺されし無數の精靈達を地獄の責より救ひ給へ、そして罪あるわれガボンをゆるさせ給へ……」